

## 〈第3章 「事」としての夢〉

小生の事の学というは、心界と物界とが相接して、日常あらわる事という事も、右の夢のごとく、非常に古いことなど起こり来たりて昨今の事と接して混雑はあるが、大綱領だけは分かり得べきものと思うなり。電気が光を放ち、光が熱を与うるときは、物ばかりのはたらきなり（物理学的）。今、心はその望欲をもて手をつかい物を動かし、火を焚いて体を煖むるときより、石を築いて長城となし、木をけずりて大堂を建つときは、心界が物界とまじわりて初めて生ずるはたらきなり。電気、光等の心なきものがするはたらきとは異なり、この心界が物界とまじわりて生ずる事（すなわち、手をもって紙をとり鼻をかむより、教えを立て人を利するに至るまで）という事にはそれぞれ因果のあることと知る。その事の条理を知りたきことなり。

[1893年12月21～24日付土宜法龍宛書簡] (『全集7』 pp.145-146)

## 第1節、覚醒時の状況の考察—外的・物的要因—

「日記」を見る限り、熊楠は、人はなぜ、そしてどのようにして夢を見るのかという「夢の原因・理由」を考え続けていたように思われる。熊楠はまず、睡眠中の身体に、どのような外的・物的刺激が与えられた結果、人は夢を見るのかということを考えようとした。熊楠は、夢を見た後、目を覚ましたときの自分の周りの状況から考察を始めている。つまり「覚醒時の状況」を記録し、考察したのである。

以下の日記は、熊楠が初めて夢に関する「考察」（覚醒時の状況の記述）を行ったものである。

1889年2月21日[木] 晴

昨夜李芳、彭世揚等五人の支那人に招かれ、豕に甘藍を煮、麦酒を飲む。発信 八常楠。

終日臥す。朝、夢に堀尾氏と尾崎行雄氏を訪んが為出発、和歌山寄合橋を西の方より上ると思ひしが、暫時朦朧たる後眼を開けば、予船のしりへに臥し、眼前に大霧有り、身近に白帆ひろがれり。堀尾／＼と呼ぶに、答有て其人見へず。暫時瞑して後に眼を開くに、白帆も霧も前の如し。良久くして気付き、よく／＼見れば、白帆はベッドシートの身边に裏がえりたるにて、霧とみえしは身後の窓より入り来れる日光の白壁に映じつよく眼に中れるなり。

(『日記1』p.194) (傍線—唐澤)

熊楠はこの夢の中で、どうやら船に臥していたようだ。そして、眼の前は霧、周りには白帆が広がっていた。熊楠は、友人・堀尾権太郎<sup>1)</sup>の名を何度も呼ぶが、返事のみあって堀尾の姿は見えなかった。夢はここまでである。そして熊楠は目を覚ます。しかし、すぐには起き上がらず、しばらく黙し、心を鎮め、冷静に周りの状況を確認している（熊楠による「夢の記憶法」の実践、第1章・第2節参照）。すると、ベッドシートが身の周りに

<sup>1)</sup> 北米で熊楠と交流した在米愛国同志同盟の民権家。1889(明治22)年2月に熊楠は、堀尾権太郎、福田友作らと、『大日本』と題する邦字新聞を発行している。[後藤 2002:42, 77 参照]

裏返っており、後ろの窓からは日光が差し込み、白壁に反射し、熊楠の眼に当たっていた。そしてこれらが夢の中の「白帆」と「霧」の原因だという結論にいたる。つまり、

- ・白帆＝身辺に裏返ったベッドシート
- ・霧＝白壁に反射した日光

ということである。

1889年3月5日[火] 晴

Cassells Co.へ廿五銭送る。

終日臥す。

昨朝奇夢を見る。高繩とも覚しき海辺にて巖丘より月を見るに、天くもり月血の如き色也。しばらくして気付き見れば、己れの眼開きあり、窓を通して東天を見居たり。此朝天曇り太陽雲に覆はれて其色血の如し。二月廿一日夢と比し見るべし。

(『日記1』 pp.195-196) (傍線—唐澤)

続く日記にも、夢と「覚醒時の状況」が記されている。天が曇り、月が血のように赤かったという奇夢である。覚醒したとき、熊楠は眼を開けて東天を見ていたという。眠りながら薄眼になっていたのだろうか。そしてその東の空の太陽は、雲に覆われて血のような色をしていたという。原因は、覚醒するか否かの状態のとき、眼に上記のような光景が入ってきたからだったと思われる。

この日記の最後に、熊楠は「二月廿一日の夢と比し見るべし。」と記している。2月21日とは、「白帆」と「霧」の夢を見た日である。両日共に覚醒時の周りの状況を記し、睡眠中の身体への外的刺激が原因となって夢を見たという記述内容である。

1889年3月15日[金] 晴

夜小沢来る。

此朝夢に、和歌山中学校授業終り、小石川砲兵工廠前を東より西へ人力車にのり走る。

有地嘗至夫来り逼る。乃ちホロを下すに、眼前朦朧<sup>もうろう</sup>として後白し。前のホロと後ろの白きものとのすきまより下を見るに、赤きものあり。しばらくして眼を注ぎみれば壁

上の彩画にして、朦朧たりしは牀の上被、白かりしは下褥なり。

(『日記1』 p.197) (傍線一唐澤)

続く夢においても、熊楠は「覚醒時の状況」を冷静に分析している。

熊楠は人力車に乗り幌<sup>ほろ</sup>を下した。すると眼前が朦朧とした。そしてこの幌と後方の何か白いものの隙間から下を見ると、そこには何か赤いものがあった。これが夢の大まかな内容である。この夢の「赤きもの」は、壁に掛けてある彩画が原因であった。そして朦朧としていたのは床の上被（絨毯）が、「白きもの」はシーツが眼に映ったからであった。

1889年4月7日[日] 快

朝暮中にあり、人に追はれて、和歌山寄合町六番地の旧宅数寄屋にかくれ坐す。背後欄の如きものあり、坐右大理石又は石膏粉製の如き像の洞下を見る。庭前はるか眼より下に赤碧<sup>まじ</sup>雑はれるものあり。眼を定め心おちつきて之を視るに、背後の欄はベッド・クイルツ、像の洞下と見しは白き枕（身の右辺によこたはれり）、赤碧雑はれるは壁間掲ぐる所の彩画なり。此夢にて、心の進まざるものは上下の念、時に従て変ずるを知る。（三月十五日の記、参考すべし。）

(『日記1』 p.200) (傍線一唐澤)

この夢の中で、熊楠は人に追われて和歌山の旧宅（寄合町六番地）の数寄屋に隠れて座っていた。背後には欄干のようなものがあり、右には大理石か何かの像があった。その洞下のみ見えたという。庭には赤碧の混じった色の何かがあった。これは視界の下方に見えたという。この夢に関する熊楠の考察はこうである。背後の欄干は、ベッド・クイルツであった（クイルツとは quilts [厚手のベッドカバー、キルト] のことか)。そして像は枕、赤碧が混じった何かは壁に掛けてある彩画であった。また熊楠は最後に、3月15日、つまり「赤きもの」などを人力車から見た夢を参考にすべし、と書いている。どちらの夢も「外的・物的要因」、しかもかなり身体に近い物が要因となっている。

ここで、熊楠はある一つの結論を導き出す。「此夢にて、心の進まざるものは上下の念、時に従て変ずるを知る」と言うのである。つまり、赤い彩画は壁に掛けてあるので、臥し

ている自分より上の方にある。しかし、夢では下の方に赤いものを見ている。3月15日の夢でもやはり、下に赤いものを見ている。

要するに、夢における上下の観念は、外的刺激から影響を受けず、夢の中のストーリーの進み具合で変化するということである。夢の中においては、上下の観念は、外的要因に左右されないのである。このように熊楠は、夢と「空間」についても考察を行っていた。

## 第2節、夢と「空間」に関する考察

### 2-1、夢と幽霊の相違

1904年3月28日[月] 雨

朝 Myers 読乍ら睡る。枕本に銀貨、銅貨、諸種無数あり、それを幾度も数へ、ふとんをまくれば又多くありとみて、さむれば正午にて、牛肉持来る為宿婦火入れに来る。

吉夢はみだりに語らずといふことを思い出し、急に此事語らざりし。可笑。

午後 Myers 読、今西氏状一受。

右夢の前に、予の室外障子のあちら（椽先）へ色川の辺の人二人来りはなしす。大坂に行き失意の由なり。予之を叱す。気の毒の由にて、今度は予の室の次室乃右の椽先と正反対の所にて又はなしすと見る。うつゝには Space 又方角あり、夢にはなきにや。

[追記]〈又平助も枕本に來り黙し坐す。(記憶のまゝ拾月二日記。平助死しは前日(九月十二日)利助に聞。死し月日未だ知ぬ内に之を記付る也。〉)

又夢は見る人の体長と直角に見る。うつゝは体長と平行乃ち地平に直角に見るにや。

夜臥内 Myers 及グベルナチス動物志怪よむ。

本日迄所得熊野菌

袋入 九百十七

画添 三百六十 新セリス 六

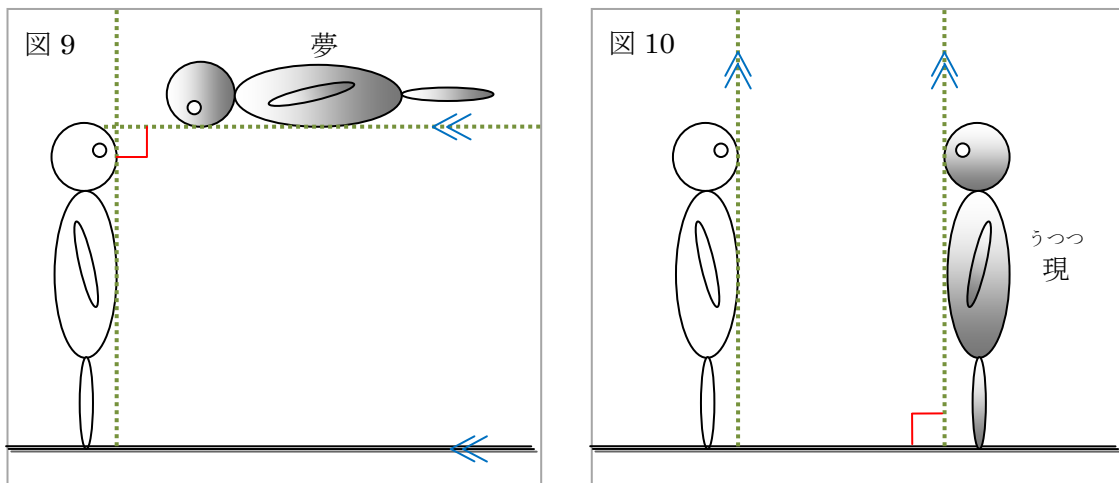
変形菌 卅七

♫帰国より 二千二百六十六

一時に二の夢見ること。

(『日記2』 p.419) (傍線—唐澤)

上記は1904年3月28日付の日記である。この時期、熊楠は那智の滝の近くにある大阪屋に宿をとり、日々植物採集に精を出していた。熊楠はここで、「うつつ」つまり「現（現実の出来事）」には空間があるが、夢にはそれが無いということを述べている。そこに居るはずのない平助が枕元に黙して座していた。熊楠はこれを「うつつ」であるというのだ。また、「うつつ」は地平に対して直角に見るという。さらに、「うつつ」にはしっかりとした「空間・space・方角（東西南北）」があるが、一方夢にはそれが無いという。やはり、前述したとおり、夢は現実のような「空間」認識が当てはまらないということである。



熊楠は、夢は（直立している）身体に対して直角に現れるという。つまり地平には平行に現れると述べている〔図9〕。そして「うつつ」は、（直立している）身体に対して並行、すなわち地平には直角に現れるという〔図10〕。

この考察は、後に以下のように整理され述べられている。

幽霊が現れるときは、見るものの身体の位置の如何いかにに關せず、地平に垂直にあらわれ申し候。しかるに、うつつは見るものの顔面に並行してあらわれ候。

[1925年1月31日付矢吹義夫宛書簡いわゆる『履歴書』] (『全集7』 p.31)

熊楠は上記書簡と共に以下の図〔写真2〕を描き、「幽霊」と「うつつ」の説明をしている。「幽霊」は地平に対して垂直に現れる。つまり現実と同じ「空間」認識で捉えることが



写真 2

できる。しかし「うつつ」は見る者の顔面に平行して現れるという。つまり現実における「空間」認識が当てはまらないという（熊楠が言う「うつつ」とは、文脈によって変わる。夢と同義であったり、あるいは明らかに夢とは異なるものを指していたりすることがあり、注意が必要である）。ここでは結局、「うつつ」と夢を同類とし、「幽霊」と区別している。従って、先の日記（1904年3月28日）に現れた平助<sup>2)</sup>は夢ではなく「幽霊」ということになる。なぜなら、枕元に座していた平助は地平に対して直角に現れていたからである。

ともかく、夢における「空間」認識は、現実とは異なり、かなり曖昧であるということである。以下で熊楠が述べているように、夢には「(ユークリッド)空間」がない、と言っても良いであろう。

……糟粕なめのはなはだしきものなり。夢中に空間なし。また二十年前のことをまるで現今に見る。……（以下略）

[1903年8月20日付土宜法龍宛書簡]（『全集7』p.433）（傍線—唐澤）

<sup>2)</sup>（南方）平助は、しばしば熊楠の前に、夢あるいは「幽霊」として登場している。どのような人物であったのかは、今のところ定かではない。熊楠による1901年10月24日の日記には、以下のように記されている。

1901年10月24日

朝オトに車ひかせ垣内に至り、五円やり、永次郎氏を訪、それより午下松村藤楠を訪、飲で夕に至り車にのり帰り、永次郎氏方に貞造氏にあふ。それより永次郎氏方に臥し、八時前帰れば、常楠平助を大坂よりつれ帰り、兄もあり。平助、熊、弥平衛、常楠、貞造及予、会議徹暁。

（『日記2』p.219）

日記にこのように記されているところを見ると、平助は、熊楠の親戚筋の者であることが推測される。しかもかなり熊楠とは関係の深い人物のようだ。この日（1901年10月24日）、熊楠を含む兄弟（姉）が一同に集まって、亡父の遺産をめぐる会議がなされた（因みに貞造とは長〔永〕岡貞造で、熊楠の母方の親類である）。その中に平助はいるのである。熊楠がアメリカで日本人仲間とともに発行したといわれる『珍事評論』にも平助が出てくる。

又直に事を大くし南方の意表外に出で、こまらせてやらんなど被思召候節は、和歌山県中橋筋板屋町三番地南方平助と申し、もと小生の養父たりしもの有之、家内犬猫共五人余り二疋にて暮し居候。それえ御掛け合ひ被下度候。

（『珍事評論』第一号）[長谷川・武内校訂 1995:11]

ここで熊楠は、平助を「もと小生の養父」と述べているが、熊楠が養子に出されたという話はこれまで聞いたことがなく、真相は不明である。この頃、平助は和歌山県中橋筋という所に住んでいたようだ。平助は最初（少なくとも熊楠がアメリカにいる頃までは）和歌山市内に住んでいたが、上述したように、後に大阪へ（父・弥平衛の遺産相続についての会議の頃には）転居しているようだ。南方平助の詳細は、第4章・第15節参照のこと。

ここまでの熊楠の夢の考察から、

- ① 人は夢を、身体に何らかの外的刺激が加わったときに見る
- ② 夢における「空間」は極めて曖昧である

ということが分かった。

このようなことは、一見すると我々にとっては、「当たり前」のように思われる。しかし、後で詳述するように、この「当たり前」が熊楠にとっては「当たり前」ではなかったのだ。

## 2-2, 幽霊に関する「近さ」と「遠さ」

熊楠は、幽霊というものを、非常に身近なものだと考えていたようである。つまり熊楠は、幽霊との「距離」が近かったと言える。幽霊を信じない者にとっては、幽霊との「距離」は極めて「遠い」（例えば、信仰心の無い者にとって、神との「距離」が「遠い」ように）。いや、「遠い」・「近い」以前に、「距離」そのものがないと言うべきであろう。ここで言う「距離」とは、もちろん客観的な、物差しなどで測定できるような「距離」のことではない。例えば、眼鏡をして読書をしている者にとって、自分と今読んでいる本との「距離」は、自分と今掛けている眼鏡よりも「近い」。それは、眼鏡が「最も身近に」使用されているため、見過ごされてしまっているからである。さらに言うならば、眼鏡という道具は「近くにないどころか、それが差しあたっては全然気づかれない[Heidegger 1927, 原・渡辺訳 1971 : 212]」のである。筆者がここで言う「距離」・「近さ」・「遠さ」とは、このような事柄のことである。ハイデガーは「最も近いもの」に関して端的に、以下のように言う。

「最も近い」と思われているものは、「われわれから」の距離が最も小さいものであるのでは、全然ない。「最も近いもの」は、足で達し、手でつかみ、眼がとどきうる平均的な範囲のうちでは遠ざかっているもののうちに、ひそんでいるのである。

[Heidegger 1927, 原・渡辺訳 1971 : 212]



さて、個々の生命体には、人の生命を活動させる基になる力のようなもの＝「精気」が宿っていると思われるが、それが何らかの形で現われたものが幽霊だとすると、あるいは幽霊を魂（靈魂）と同義だと考えると、実は、幽霊とは、我々にとって「最も身近なもの」なのかもしれない。身近すぎて見過ごされているものなのかもしれない。肉体に魂が宿っているのならば、我々にとって、普段「近く」にあるのは肉体の方で、魂の方は近くにありすぎて逆に遠ざかっているのではないだろうか。

我々は普段、自分の魂のことなど考えることは殆ど無い。おそらく例えば、重病などで、もはや命が助からないときになって初めて、自分の魂の行方などを考えるのではないだろうか。つまりそれは、自分の魂（精気）が危機に瀕したときである。そのとき初めて隠されていた（最も近いが故に遠ざかっていた）魂は「近く」に現われてくる。掛けていた眼鏡が壊れたとき、初めてそれが「近く」に現われてくるように。では熊楠は、なぜこの「最も身近なもの」に気付くことができたのであろうか。それは、いわゆる「那智隠栖期」、熊楠は、精神的危機状況にあったからだと言える。もっと端的には、魂の危機にあったからだと言える。つまり、「死」が熊楠に確実に迫っていたのである（「那智隠栖期」の精神的危機状況については、本章・第5節5-2で詳述する）。この頃の熊楠の日記には、以下のような記述が見られる。

1904年4月25日[月] 雨、夜大風雨

夜大風雨、予、灯を消して後魂遊す。此前提もありしが、壁を透らず、ふすま、障子等開き得る所を通る故に迂廻なり。枕本のふすまのあなた辺迄引返し逡巡中、急に自分の頭と覚しき所へひき入る。恰も vorticella が螺旋状に延し後急に驚きひき縮る如し。飛頭蛮のこと多少かゝることより出しならん。

（『日記2』 p.431）（傍線—唐澤）

vorticella とはツリガネムシのことであるが、熊楠はツリガネムシが螺旋状に伸びた後急に縮まるように、自分の魂が抜け出たのち、また元の位置（自分の頭と覚しき所）に戻ったという。熊楠の魂は、肉体から抜け出ているのだ。これはいわゆる「幽体離脱」体験である。

熊楠は「那智隠栖期」、魂の危機に瀕し、何気なく当たり前前に生きているという事柄から遠ざかる経験をした。そして遠ざかって初めて、「最も近くにあるもの」=魂というものに実感をもったのである。遠ざからなければ、「最も近くにあるもの」に気付くことは決してできないのである。

### 第3節、夢の出所の考察—内的・心的要因—

夢の主たる原因は、外界の物的作用である。しかし次に述べるように、熊楠は次第に唯一それ(外界の物的作用)だけが夢の原因となるわけではないと考えるようになっていく。

1893年10月17日[火]

夜早く臥す。夢に波木井九十郎、川崎虎之助二氏と船にて高野辺を下る。川上に鼈<sup>べつ</sup>二疋浮り。次に三才図会に見たる鼈<sup>げん</sup>の如きもの(シヨウカクボウ様のもの)大なるが浮き来る。川崎云く、高野には徳川將軍の時はなちし豚あり、今度見ぬが、夏休み中に見する故見るべし、云々。扱、船一方にかたぶき、物みなころぶ。物は書物なり。それを三人足にておさえ、又肱下に積みて船行す。波木井、川崎二人、新様の流行唄うたふと見る内に、目さめぬ。時に夜雨軒を打て蕭条。

此昼、福田令寿氏え耶蘇教徒の事を書きおくる中に、高野山のこと二三入れたり、扱、前年、父母弟と高野に詣せし帰途、川船にて下りしが、岩手辺にて暫時船止る。四方囲たれば外は見えざりしが、川水の流るゝ音、丁度雨の如きを心にとめしことあり。此夢の高野は紀川の北なりしもおかし。波木井、川崎など見しは何の事か不知、されど昨日思しは、明治十三年より今に至て已に又十三年勉めざるべけんやとおもへり。二人は十三年頃の校友也。あわれなることをも見るかな。

(『日記1』 pp.324-325) (傍線—唐澤)

この夢の概略はこうである。熊楠は、波木井九十郎と川崎虎之助という旧友と共に、船で高野山辺りを下っていた。川には鼈<sup>べつ</sup>や鼈<sup>げん</sup>(スッポンやアオウミガメ)のようなものが浮いていた。船は片方に傾き、積んでいた書籍はみな倒れた。そして三人で倒れた書籍を足

で押えながら川を下った。また、波木井と川崎は当時の流行歌を歌っていた。

目が覚めたとき、外界の様子は、雨が降っており、雨が軒を打つ音が聞こえていたという。なぜ高野辺の夢を見たのか。その原因を熊楠は、「此昼、福田令寿氏え耶蘇教徒の事を書きおくる中に高野山のことを二三入れた」からだという。また昔、両親と弟と共に高野山詣をした帰りに、船で川を下ったときのことを想起し、そのときの川の水が流れる音は、雨音に似ていたことを熊楠は子供心に覚えていたという。どうやら、外界の雨が軒を打つ音が、熊楠に川の水を連想させたようである（しかし、それは逆に、心にあった「川の水に関する思い」が外界の「雨が軒を打つ音」を夢の中へ引き込んだとも言える）。

つまり、夢に出てきた高野山辺りの原因は、昼間の書簡に高野山のことを書いたことが心に残っていたから、そして川下りの原因は、雨音が水を連想させたから、またその雨音は、以前高野詣を家族でした帰りに、船で川を下るとき聞いた川の流れる音に似ていたということである。ここには、今までの考察には無かった「内的・心的要因」、つまり日中の記憶や昔の思い出が記されている。

同じ内容を、熊楠は土宜法龍宛書簡の中でも語っている。

第三、中井氏方にてお目にかかりし数日前、小生友人に一書を寄せし中に、高野山の僧徒が戸屋某というものを阮殺こうきつしたることを述べ、小生前年その子孫の家を見てむかしを忍べる等のことを書せり。さてその夜早く寝に就きしに、夢に旧友波木井九十郎というものと船にのりて、高野山を北に見て紀川を西へ下る。(これ理外なり。何となれば、高野山を南に見るにあらざれば紀川を西へ下ることはならぬ。)さて川を見るに、『和漢三才図会』に見えたる竈げんのごときもの二つうか飛び来たる。それより船危くしてほとんど覆くつがえらんとす。二人の膝よりころげおつるものを見るに、みな書籍なり。と見てさむれば、夜雨軒を打ちて蕭条たり。

その音によりてたちまち想起せり。今より十一年前、父母および弟と高野に詣し、帰るとき船に上がり紀川を下る。岩手にてしばし船止まり、皆々陸に上がり、大便小便などす。小生は船中に止まりおりたり。四方はみな篷とまにてかこいたれば外も見えず。しかるに一種異様の音しきりに聞こゆ。小生の父が伴い行きし出入りの町人松村という老人いわく、これは川が二つ会する所（野上川と紀川）にて、川底の石礫が水あつに軋し

てなるなり、という。小生は雨の降るならんと思ひ、見出でしに雨にあらざりき。その老人いわく、家にありて雨をきくに似たるゆえ左様いなるべし、と。(これは日本にて、紀州辺でオダレとか申し、銅のといを軒にかけ、それに雨のあたる音のごとくなりしなり。) 故に夜雨の英国で蕭条たる音とは異なり。されど、この夜雨蕭条たるが耳覚に入りて、それより日本にありし日のオダレに雨のおつることを経て、右の高野詣でのことを思い出させるなり。

波木井というは、その二年前に小生と友たりしが、東京に遊学せり。さてその母かなしんで、やがて父と共に三味線工を止め、東京へ引っこしたりとのことにて、子を愛する人なりとて毎度その近傍のもの来たり小生の家で話す。小生もその人を知ること久しかりしゆえ、いつもこの人のこと思えり。さてその時船中に三味線屋の男一人ありて、右の波木井のことなど語りおりたるなり。夢中に鼈を見しは、この日『五雑俎』を見しに鼈のことかきありし。船危しと見しは考え得ず。されど書籍は、小生の夜は然せざりしが、毎度臥に就いてもなお小詞など一時間ばかり見る。ために三、四、五冊も重ね、ときとしては胸の上においたままねることあり。それより考うるに、その夜も読むつもりで三、四冊ベッドの上におきしが、小生の体動くに従いてころびしにや。かくのごとく気づいてみずからその方法をもってしらぶれば、夢なども条理来由は多少あり、ただ混雑せるなり。

[1893年12月21～24日付土宜法龍宛書簡] (『全集7』 pp.144-145) (傍線—唐澤)

日記とほぼ同じ内容ではあるが、ここではさらに詳細に夢の原因を考察している。日記にはなかった記述として、この夢で鼈を見た原因と、倒れた積荷が書籍だった原因の考察が記されている。まず鼈であるが、これは、この日『五雑俎』に鼈が書いてあるのを見たからであるという(心的要因)。そして、夢の中で積荷(書籍)が倒れたのは、いつも夜寝るとき読むつもりでベッドに三、四冊重ねて置いてある本が、寝返りをうったときに、ちょうど崩れ落ちたためではないだろうかと述べている。因みに「高野山を北に見て紀川を西へ下る。(これは理外なり。何となれば高野山を南に見るにあらざれば紀川を西へ下ることはならぬ。)」とは、まさに夢における「空間」の曖昧さを指摘している箇所である。この夢の内容とその原因およびそれが「物的要因」か「心的要因」かを〔表1〕に示す。

## 第4節、「事の学」への昇華

### 4-1、「事」、「心」、「物」

熊楠は、上記法龍宛書簡の最後に、  
夢には必ず条理があるが、それは非常

に複雑に絡み合っている、と述べている。確かに、これまで夢は「外的・物的要因」によって現れるものだと述べてきた。しかし、熊楠は、上述の「高野山の川下り」の夢においては、昼間の出来事や子供の頃の思い出など、「外的・物的要因」だけではなく、心に留まった事柄・記憶、つまり「内的・心的要因」も夢には関係していることを述べている。ここまできて、熊楠の夢に対する考察はより深まったと言える。この考察が、いわゆる「事の学」へとつながっていく。上記の法龍宛書簡では、この夢の考察の後に、「事の学」の説明が、いささか唐突に記されている。[写真3]は、左の円に「心」、右の円に「物」、両円が交わる箇所に「事」と描かれている。

[上記、法龍宛書簡の続き]

小生の事の学というは、心界と物界とが相接して、日常あらわる事という事も、右の夢のごとく、非常に古いことなど起こり来たりて昨今の事と接して混雑はあるが、大

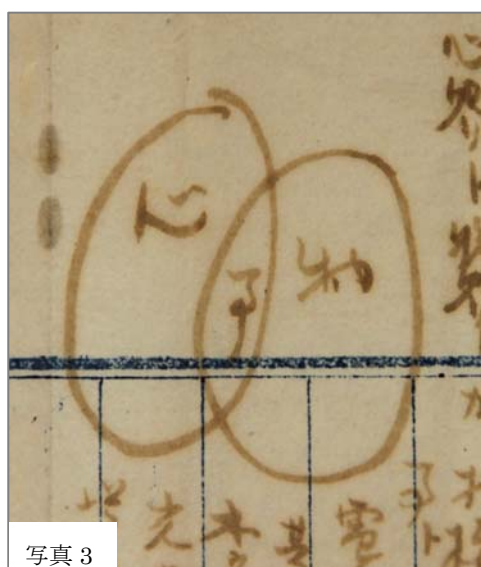


写真3

綱領だけは分かり得べきものと思うなり。電気が光を放ち、光が熱を与うるときは、物ばかりのはたらきなり（物理学的）。今、心はその望欲をもて手をつかい物を動かし、火を焚いて体を暖むるときより、石を築いて長城となし、木をけずりて大堂を建つるときは、心界が物界とまじわりて初めて生ずるはたらきなり。電気、光等の心なきものがするはたらきとは異なり、この心界が物界とまじわりて生ずる事（すなわち、手をもって紙をとり鼻をかむより、

「事の学」の図[1893年12月21日~24日  
土宜法龍宛書簡]、『全集7』平凡社、1971 p.145  
写真提供：南方熊楠記念館

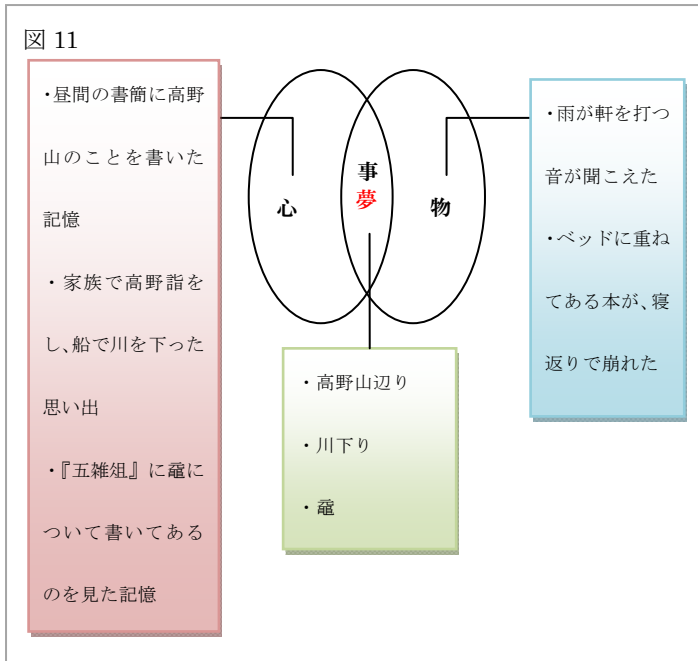
表1 1893年10月17日付日記の夢の要因

| 夢     | 原因                  |      |
|-------|---------------------|------|
| 高野山辺り | 昼間の書簡に高野山のことを書いた    | 心的要因 |
|       | 家族で高野詣をし、船で川を下った思い出 | 心的要因 |
| 川下り   | 雨が軒を打つ音が聞こえた        | 物的要因 |
|       | 家族で高野詣をし、船で川を下った思い出 | 心的要因 |
| 鼈     | 『五雑俎』に鼈が書いてあるのを見た   | 心的要因 |
| 倒れた書籍 | ベッドに重ねてある本が、寝返りで崩れた | 物的要因 |

教えを立て人を利するに至るまで) という事にはそれぞれ因果のあることと知らる。  
その事の条理を知りたきことなり。

[1893年12月21~24日付土宜法龍宛書簡、写真3] (『全集7』pp.145-146)

(傍線—唐澤)



電気や光などは、物理学的なもの、つまり物的作用である。そして「温まろう」・「長城を築こう」・「大堂を造ろう」という「欲望」は、心の作用である。熊楠によると、両者が交わったとき、初めて「事」が生じるという。「温まろう」という心的作用だけでは何も起こらない。そこに火という物的作用が交わって、「火をもって温まる」という「事」は生じるのである。従って、「事」たる場合は、「心」と「物」の関

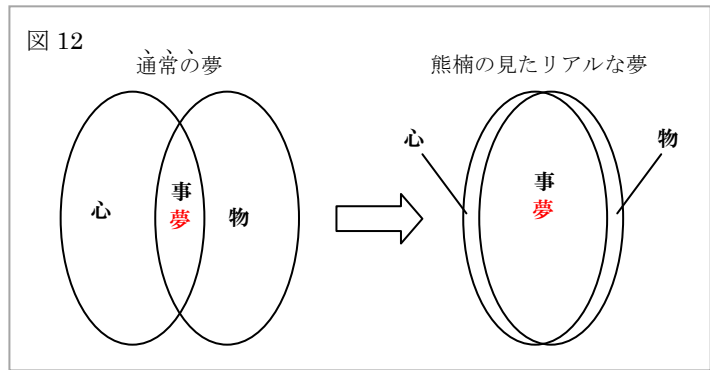
係を成立させる処でもあるのだ。

熊楠は、夢も同じであると考えた。「昼間の書簡に高野山のことを書いた」・「家族で高野詣をし、船で川を下った」などという記憶（心的作用）と「雨が軒を打つ音が聞こえた」などという外界の状況（物的作用）とが交わって夢という「事」は現れるのである〔図11〕。また「心」と「物」がこのように、適度に交われるのは「事」という場があるからでもある。（この「事」・「心」・「物」は、そのまま「南方曼陀羅」の五つの要素の内の三つ——「事不思議」・「心不思議」・「物不思議」——に引き継がれることになる。）

しかし、このような考察は、果たして新しい事柄であろうか。「心的・内的要因」と「物的・外的要因」が接触して何らかの事柄が生じる——これは通常、我々は当たり前のように考えている。自己（心）と他者（物）が接触することができるのは、ごく当然のように思っている。その理由は、我々が、対象と全く接触できない程極端に「遠く」に離れて居るわけでもなく、対象と一体化してしまう程極端に「近く」に接近して居るわけでもない

からである。つまり、常に対象との関係において、自己が「適当な距離」を保持しているからである。しかし、「極端人」・熊楠の場合、そうではなかった（序章・第1節参照）。熊楠と対象との

「距離」は、極端に「遠い」か、極端に「近い」か、あるいは、自己（心）と他者（物）が全く分離する程離れているか、ぴったりと合わさってしまう程接近しているか、そのどちらかであった。故に熊楠にとって、両者が適度に交わる場であり、また現象でもある「事」とは、極めて不思議な出来事であったのだ。夢も、「心的・内的要因」と「物的・外的要因」が適度に交わったとき生じる出来事である。しかし、あまりにもリアルに夢を見ることの多かった熊楠にとって、「事」たる夢は、時に大きく膨らみ過ぎることさえあった〔図12〕。その状態から熊楠が、必死に戻ろうとする様子は、第1章・第3節で既に見た通りである。我々とは異なり、熊楠にとっては、「心」と「物」が適度に交わって生じる夢の方が、珍しい「事」であったと言えるかもしれない。



#### 4-2, 「物」と「心」—誘発するものと誘発されるものとの関係—

これまで見てきた通り、熊楠は、「物」と「心」の両面から夢を記録し、探究し続けた。しかし、熊楠はその際、決して「物」と「心」のどちらか一方を優位に立たせて考えるようなことはしなかった。そもそも、ここまで述べてきた「外的・物的要因」と「内的・心的要因」は、形式の区別であって、事柄自身の区別ではない。端的に言えば、両者は「区別なき区別」なのである。このことを、以下、ヘーゲルの言葉を基に説明を行う。

注意すべきは、夢というものは、「外的・物的要因」が「内的・心的要因」を誘発させて現出するだけのものではない、ということである。なぜなら、「内的・心的要因」は、「外的・物的要因」に対して誘発するものであり（つまり、「外的・物的要因」の誘発する力は、「内的・心的要因」によって誘発させられている）、そうすることで初めて「外的・物的要因」は、「内的・心的要因」を誘発できるからである。ヘーゲルは、以下のように述べている。

……他方の力から誘発される力が、また他方の力に対し誘発するものであり、そのため初めて、他方の力が誘発する力となるのだということであった。

[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 179]

例えば、熊楠による 1893 年 10 月 17 日[火]の日記＝「高野辺の川下り」の夢であれば、「雨が軒を打つ音」が「昔、家族と共に船で川を下った記憶」を誘発し思い出させたということは、前者が後者に誘発させられた、とも言えるのである。従って、このような二つの区別（「物」と「心」）は、本当は何ら区別ではない、「区別なき区別」と言える。両者は、もともと「同名のもの」なのである。だからこそ両者は本質的に互いに引き合うことができる（誘発し合える）関係にあるのである。ヘーゲルは、端的に以下のように述べている。

なぜならば、自分自身から自分をつきはなすものは同名のものであり、このつきはなされたものは、同じものであるため、本質的には引き合うからである。

[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 191]

「物」と「心」の区別は、いわば「同名のもの」の区別である。「各々はある他者の反対ではなく、純粹の反対である[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 199]」と言っても良い（先取りになるが、自己が対象へ深く「indwelling [潜入・内在化]」できるのは、両者が上記のような関係にあるからでもある〔[第4章](#)で詳述〕）。そして、その本質は「一つであること」・「統一」である。また「統一」は、自らに「対立（区別）」を含み持つからこそ「統一」たり得る。

自立的な諸々の項は自分だけで〔自分に対して〕在る。が、この自分だけの有〔対自存在〕はむしろそのまま統一に反照することでもあり、またこの統一は自立的な諸々の形態に分裂することでもある。統一は、絶対に否定的なつまり無限な統一であるから、分裂する。そしてこの統一が存立であるのだから、区別もこの統一においてのみ自立性を保持するのである。



[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 211]

「物」と「心」、「統一」と「対立（区別）」、それぞれの契機は、各々が他方よってのみ在る。しかも「各々がそれであるとき、そのまま他者によって在るようなものではもはやない[Hegel 1807, 檜山訳 1997 : 172]」、つまり、「物」が在るとき、そこには「心」が在り、両者が「区別」されるということは、両者は同時に「統一」でもあるということである。我々は、「統一」と聞くと、「分かつことができないもの」と考えがちであるが、決してそうではない。「統一」と言った時点で、そこには既に「二つに分かつこと（対立）」が含まれて（起こってしまって）いるのである。「統一」（厳密には「人間的統一」）は、それ自身で「分裂」を抱えているから、いつまでも完了することはない。また各々の契機は、全く関係のない別のもの同士ではなく、絶対的に否定されたもの同士——自己と他者で言えば、自己と自己がそれ自身で持っている他者とでも言うべきもの同士——であるから、この「統一」とはいわば、「絶対的な否定」を伴ったものなのである。

筆者は、この「統一」の場と、「分かれたもの」（「物」と「心」）が関係する場の間には、前者と後者が媒介する処が、つまり「中間」（自己と他者とが「適当な距離」に在る処）とは位相の異なる〈中間〉としての「通路」があると考えている。このことについては、改めて、第6章及び終章で詳述することにする。本章では、もう少し「外的・物的要因」と「内的・心的要因」から、夢について考察していくことにする。

## 第5節、夢の原因を探る 1

### 5-1, 1894年—覚醒時の状況と心に留まった想い—

夢の考察から「事の学」を導き出した後も、熊楠の夢の原因追究は続く。以下、日記の夢に関する記述（「覚醒時の状況」あるいは「夢の出所」を明記しているものの内、主なもの）を抜粋する。以下に示す日記中の二重傍線      は夢の「外的・物的要因」（外界の物的影響）を、傍線部      は「内的・心的要因」（心に留めておいた事柄・往年の記憶など）を表わす箇所として、筆者が施したものである。因みに、点線枠内は、その年の

主な出来事である。

〈1894（明治27）年の主な出来事〉（ロンドン滞在中）

- ・ 前年に引き続き、土宜法龍と文通を重ねる
- ・ 7月、日清戦争勃発（～1895年4月）
- ・ 8月31日、バロン・オステン・サッケン（外交官。膜翅類まくしの研究者でもあり、熊楠とは『ネイチャー』を通じて知り合った）が来訪する

1894年2月9日[金] 晴

此朝、予ベッドにありて夢に、予旧和歌山寄合町の雑庫の中の高き台榭様のものゝ上に臥して危く下辺をのぞむと。昨朝さめて、上の蒲団ことの外一方にかたむき、危く身も落かゝりおりしを見出たるによることか。

（『日記1』 p.333）

1894年2月14日[水] 晴

此朝、川瀬善太郎氏を夢る。これは昨夜氏も吾れも在外中に一の親に別れたりしと想ひしによる。

（『日記1』 p.333）

1894年11月29日[木] 陰

朝ふとんのへり左胸にかゝる。予夢、猿右の処へかき付くと。

（『日記1』 p.357）

1894年2月9日の日記には、「覚醒時の状況」が描かれている。夢の中で熊楠は、高い所に横になって危なげに下を覗き込んでいた。目を覚ますと、布団が一方に傾き、ベッドから危うく身が落ちそうになっていたという。これは外界の物的作用が要因となって見た夢であった（この夢もそうだが、以下で述べていく「外的・物的要因」と「内的・心的要因」も、先述した通り形式の区別であり、事柄自身のものではない）。

同年2月14日には、同郷で友人の川瀬善太郎<sup>3)</sup>の夢を見ている。これは、昨夜川瀬も熊楠自身も共に、在外中に故郷の親を亡くしたことをふと考えていたことが原因だということ(内的・心的要因)。

同年11月29日には、熊楠は、猿に左胸を搔きつかれる夢を見ている。目を覚ますと、布団の縁が左胸にかかっていた。つまり「外的・物的要因」によって夢を見たということである。

#### 5-2, 1903年—幽冥に関する問答他—

〈1903(明治36)年の主な出来事〉(いわゆる「那智隠栖期」)

- ・ 1900(明治33)年10月、帰国
- ・ 3月、英文論考「日本人太古食人論」・「燕石考」完成(『ネイチャー』、『ノーツ・アンド・クエリーズ』、『サイエンス』等へ投稿するが、掲載されず)
- ・ 7月18日、土宜法龍宛書簡にいわゆる「南方曼陀羅」が記される

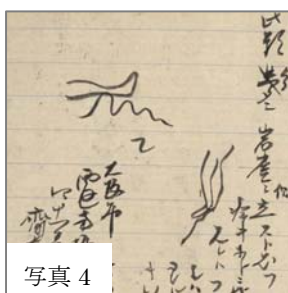
1903年3月10日[火] 快

暁に夢に海辺とも覚き寺堂に人集る。聞ば予の弟が色川辺の人多くよび角力して見するなり。(海辺とたしかに分らず。天のぐあいより光線の明の度にて分ると見ゆ。又角力かなにかたしかに不分。これは夢中には思ふのみ。故に色々雑はる思ひ明に語るぬ故也。) キュバにてあひし為吉にあふ。昔の通りの美少年ながら額にフラウン入れり。有井といふ僧につれられ来り、かるはざとかせしといふ。住所とふに、今一人の子遙津とかいて見す。ヨヅとよむ。故清原彰甫来り、人をさけてはなす。予問ふ。幽冥にありては此世に大なるはたらきある人と自ら修徳せし人といづれか貴なる。答。そんな別なし。問。然らば一切別なきか。答。有り。(此处言語にきかねども監獄の内に色々分別ある図の如く見ゆる。ラクルアにて見し。) 予問。此世界と幽冥と異なりや、答え。明かに予自身中に理会す。此世界の原則は人間のみのものなり。故に幽

<sup>3)</sup> 和歌山県立師範学校卒、東京帝国大学農科大学教授、林学博士。渡米前の8月、熊楠と共に高野山を参詣した。後に、熊楠が南方植物研究所設立の募金の為、上京した際、電話で話をしている。[飯倉 2006:45,304]及び[後藤 2002:219-220]

冥の原則と異なり。但し幽冥に入て後、此世界の原則亦宇宙の一大法の一部分なれば、此世界の原則を推して幽冥の原則を解し得べく、たとひ全く反せることあるも、其スタンダードは一なることを解し得べしと。予、幽冥は如何。清原答。常に悽<sup>(ママ)</sup>噪を覚ゆと。又曰。彼界又種々あり、彼より此に転じ究りなし。予答。遂に安<sup>(ママ)</sup>処なきか。彼答。有り、但し此世界と同く、洞達するの士に非れば到り難しと。(前夜モンタグの死論の評をノーツ・エンド・キリスにて読しなり。)

(『日記 2』 pp.329-330)



1903年8月13日[木] 快

此朝、幻に岩崖に側立すと思ふ。足のそこ痒きほどに感ず。さめて見ればふとんのしは、乙の如くよれる上に足おき臥たり。

(『日記 2』 p.369)

まず、1903年3月10日の日記をしてみる。ここで描かれているのは、熊楠が海辺のような場所で相撲の余興か何かを見ている夢である。そこには以前キューバで会った為吉という人物もいた。その後、熊楠は、故・清原彰甫と以下のような、この世とあの世に関する問答をしている。

熊楠：「あの世においては、この世で（世の中に対し）大きな功績を残した人間と、自ら静かに修行し徳を修めた人間ではどちらが貴ばれるのか。」

清原：「そんな区別はない。」

熊楠：「そうであるならば、一切何も区別はないのか。」

清原：「いや、ある。」（ここまでの会話で、熊楠は監獄の内に色々区別がある図を思い浮かべている。それはラクルア（Paul Lacroix）の本『*Military and religious life in the middle ages and at the period of the Renaissance*』（『南方熊楠邸蔵書目録』所蔵番号[洋 230.20]）で、かつて見たことがあるものであった。）

熊楠：「この世と幽冥（あの世）は異なるのか。」

清原：「私は明らかに理解している。この世の原則は人間のみのものである。この点が幽冥の原則とは異なる。ただし、この世の原則は大宇宙の法則の一部でもあるので、

この世の原則をもって推測し幽冥の原則を解すこともできる。たとえこの世と幽冥において全く反することがあっても、その基本は一つであると理解すべきである。」

熊楠：「結局、幽冥とは何なのだ。」

清原：「常に喧噪として感じる。幽冥にも様々あって、あちらからこちらへと転じ、留まることはない。」

熊楠：「では常に安心できる所はないのか。」

清原：「いや、ある。ただし、この世と同じく、ある一定の域に到達した者でなければそこに至るのは難しい。」

熊楠がこの奇妙な夢を見たのはなぜか。熊楠によるとそれは、前夜モンタグの死論の評を『ノーツ・アンド・クエリーズ』で読んでいたからだという（内的・心的要因）。この評論の詳細は不明であるが、題名から推すと「死」あるいは「あの世」についてのことであろう。しかし、原因はおそらくモンタグの死論の評だけではない。この時期、熊楠は「精神的危機状態」にあった。英国からの不本意の帰国、家族からも理解されない孤独、また熊楠の渾身の論考「燕石考」が、『ノーツ・アンド・クエリーズ』等に掲載されなかった落胆、さらに古来、「死の世界」と限りなく近いとされてきた幽邃極まる那智山での生活は、いやがおうでも熊楠に「死」を意識させたであろう。この夢は、熊楠と清原の問答形式となっているが、それは夢である限り、熊楠自身による、いわば「自問自答」だと言える。

清原（熊楠）は、幽界を、この世の原則（法則）をもって推測することができるという。なぜなら、両者（幽界とこの世）の根本は一つだからである。また、幽界には大きく分けて二つあるようである。一つは喧騒とした世界、もう一つは安らぎの世界である。安らぎの世界とは、「涅槃」あるいは「大日如来そのもの」と言い換えることができるかもしれない。熊楠は法龍との書簡のやり取りの中で、「万物悉く大日より出、諸力悉く大日より出る」[1902年3月26日付〔推定〕土宜法龍宛書簡]（『高山寺資料』p.275）と言い、さらに「【我々】は大日の体より別れしとき迄の大日の経歴は一切具」[1902年3月23日付土宜法龍宛書簡]（『高山寺資料』p.255）（【 】内一唐澤）していると述べている。つまり、この世のものは全て、幽界の中でも完全な安らぎ（それは「無」をも意味するのだが）である「大日如来」から分かれ出たものであるから、この世の「法則」にも、その情報（経歴）は全て備わっているのである。だからこそ、人間は「幽界」を推測できるということになる。

熊楠の「精神的危機状態」は翌年には、より明らかな形（幽霊の現出、体外離脱体験など）で現われてくるが、1903年の時点でもその兆しは見えていた。例えば以下の出来事も、熊楠が言うところの「精神変態」であろう。

1903年7月22日[水] 雨

終日在寓、午後仮寐す。ソナンビュール如き症をおこす。

（『日記2』 p.363）

ソナンビュール（Somnambulism）とは、いわゆる「夢遊病」である。「夢遊病」は以下のように定義されている。

睡眠中に突然起き上がって歩き回ったりするが、目をさましても発作中の出来事についてまったく思い出せないといった異常状態、ないしその行動をさす。数分程度のものから数時間に及ぶものまであり、正常な子供にもときにみられることがあるが、昼間の心的葛藤がその一因になっているといわれる。精神分析では、人格の分離現象の一種に分類される。

[Britannica 2004：電子辞書版]

このように、（どのようにして自分が「夢遊病」のような症状を起こしたのかを知ったのかは不明であるが）熊楠は、1903年には既に「精神変態」を起こしていたと言える。翌年1904年にかけて、その頻度は増してくる。それが、彼に「死」を意識させても決して不思議なことではなかった。この頃の日記や書簡には、「死」の文字が多く現れる。

死出の山路くまざゝはえしし合せや 死出の山路はなほさゝ（酒）斗り

[1904年1月1日付日記]（『日記2』 p.397）

この状一度封せしが、思い出づること少々あるから、死なぬ間に聞かせやるなり。

[1904年1月4日付土宜法龍宛書簡]（『全集7』 p.441）

これらの記述からは、熊楠が明らかに自身の「死」を意識していたことが覗える。周知の通り、熊野・那智山は古来、「死」の影が付きまとう場所であった。那智山の一角を占めている妙法山の阿弥陀寺は、死者が詣でる寺として知られており、本堂には「死出の山路」の額が堂々と掲げられていたという。一方で、那智山は「再生」の場所でもある。例えば、源頼朝に源氏再興の旗揚げを促したことでも知られる文覚上人（1139～1203年）は、那智の滝で修行中、一度息絶えたが、不動明王の使いである二人の童子によって再び蘇ったなどという伝説がある。この他にも、熊野あるいは那智山における「死」と「再生」にまつわる物語は、数多く残っている。熊野・那智山——そこは「生」と「死」が混在する「異空間」なのである。筆者は、何度も那智山を訪れたことがあるが、その度にその「空気」が明らかに非日常的であることを感じた。そこでは「生」の世界と「死」の世界の「空気」が混じり合っているのである。そこは、二つの世界の「<sup>パサージュ</sup>通路」なのである〔写真5参照〕。

熊楠は、一方の足を「生」の世界に、もう一方の足を「死」の世界に、そしてその身を両者の〈中間〉に置いていた。かろうじて「自己」を保ちつつ、「あの世」と「この世」の両方を覗き込むことができる場、そこが「<sup>パサージュ</sup>通路」である（「<sup>パサージュ</sup>通路」の概念については、序章・第4節・注釈3参照のこと）。そしてその場所は、「この世」（生）と「あの世」（死）の思索が最も深まる処でもある。

熊楠はこの「<sup>パサージュ</sup>通路」において「死」を本当に間近に感じていた。日々「死」の世界へ入



り込んでしまう可能性が熊楠には付きまどっていた。しかし、「死」を意識できるということは、その対極にある「生」があるからである。熊楠は「死」を間近に感じることで、「生」を放棄しようとしたのではない。確かに「生」を放棄したい程の自暴自棄に陥っていたことは確かであるかもしれない。しかし、

写真5 那智・熊野古道（2009・5 筆者撮影）「生」と「死」、「この世」と「あの世」が混じり合う「<sup>パサージュ</sup>通路」

「死」を願えば願うほど、「生」はその輪郭をくっきりと現わすものである。なぜなら「生」なくしては「死」は考えられず、「死」なくしては「生」は考えられないからである。「生」だけ、「死」だけ、という在り方は決して成り立たないのである。事実、熊楠が「死」を意識していたこの時期こそ、彼の思想は最も深化し、輝いていたのである。熊楠の思想の中核である「南方曼陀羅」が形成されたのも、この時期だった。また膨大な数の粘菌や隠花植物を採集したのも、やはりこの時期であった。「那智隠栖期」、明らかに熊楠の「生」は輝いていたのである。

熊楠は、精神的な「危機 emergency」に陥ることで、自身の思想に「創発 emergence」を起こしたとも言える。「emergency」と「emergence」はその語を見ても明らかのように、密接に関係するものなのである。「危機」から脱出しようという衝動は、人に思いもよらない力を発揮させるのである（＝創発）。

熊楠はこの時期、集中的に粘菌の採集と記録に精を出している。あたかも自身にその対象を「取り込む introject」かのように採集し、そして、あたかも自身をその対象へ「投げ入れる（投影する） project」かのように写生・記録した。そのようにして熊楠は「孤独」を乗り越えようとしていたかのように見受けられる。しかし、その「孤独」は、決して消えることはなかった。

というのも、認識を通して、対象は、好むと好まざるとにかかわらず、主体によって呑み込まれ〔吸収され〕てしまい、そして二元性は消滅してしまうからである。それはまた、ひとつの脱自〔忘我〕でもないだろう。というのは、脱自においては、主体が対象のうちに吸収されて、主体はその統一性<sup>ユニテ</sup>のうちに再び自己をとりもどすことになるからである。

[Lévinas 1948, 原田訳 1986 : 6]

ここでレヴィナスが言う通り、「採集行為」によって）対象が主体（熊楠）に完全に「取り込まれ」てしまったとき、そこには自己も他者もなくなる。同じように（「観察行為」によって）主体（熊楠）が自身を、対象に完全に「投げ入れ」たとき、そこには瞬間的な「忘我」（エクスタシー）＝「統一」があるかもしれない。同時に、自己と他者は消滅する。だ



が、その「統一」は永続しない。「統一」は「無」と同義であり、そして「無」は自己に「不安」をもたらすのである。「無」という場を抜け出し、自己を保持したいという欲求は、この「不安」に加速をかけ、自己は再び「統一」から分離し、「孤独」になるのである。そして分離した人間は、またこの「統一」に思いを馳せる。「統一」から分離し「孤独」にならなければ、「統一」は希求できないし、「統一」は在り得ない。——人間は、そのような意味において「孤独」を欲していると言えるのかもしれない。

次に、同年8月13日の日記を見てみる。この日の夢の中で、熊楠は岩崖に側立している〔写真4〕。また、足の底が痒いとも感じていた。目覚めて見ると、布団のよれたしわの上に足を置いて臥していた（外的・物的要因）。熊楠はここで「幻に……」と書いている。これは夢と同義と考えて良いであろう。因みに熊楠が夢以外の「幻覚」・「うつつ」・「幽霊」などを記す際の特徴として、「空間」の問題と共に語ることが多い（「幽霊」は地平に対して垂直に現われ、夢は寝ている人の顔面に平行に現われるなど）。しかしこの「幻」は、単に「現実」あるいは「幽霊」とは異なるものという意味くらいで、夢と同義であると考えて良いであろう。

### 5-3, 1904年—連想に次ぐ連想—

〈1904（明治37）年の主な出来事〉（いわゆる「那智隠栖期」）

- ・ 2月12日、マイヤーズの『ヒューマン・パーソナリティー』が届く
- ・ 2月6日、日露戦争勃発（～1905年9月5日）
- ・ 7月、南海療養病院に10日間滞在
- ・ 10月6日、陸路田辺へ向かう

1904年1月3日〔日〕 晴、大風 寒

朝ブリチシュ博物館僕フレッチャー（十八九の男）に髪かりてもらふと夢む。余此頃髪長く生たり。昨今かりに之<sup>ゆか</sup>んと思ひ居る。

（『日記2』 p.397）

1904年5月21日[土] 雨 小満

夢に、何れよりも知ず、名草郡鳴滝に之く。此間の通り、町屋にして甚長し。漠然と本郷より白山王子に之く道中を思ひ合す。扱鳴滝の寺にまいり吉田聖天を思出し、あれに見ゆるから左迄遠くは来ずと思ひ、又右本通り人少く西へまがれば目良氏（田辺）宅と思ふ。其傍に往年ジャクソンウヰルにありし原野如きをありと思ひ出す。その頃右原野にありてキューバのいなか道を思出せしことをも連想す。（ハバナより港東のいなかえ往くとき丁度右の王子道を思出せしことあり。）

故に夢中に諸種の地理を合成することあるなり。

（『日記2』 p.438）

1904年5月27日[金] 雨

暁故羽山蕃次郎（見しときの顔に非ず、予キューバに在しとき送來りし写真の通り）と何れかえ之き、かえりに駿河台下の其頃行し西洋料理店に立よる。亭主出來りビールくれるが注文通り早く持來らず。羽山は他の店にゆき他人と話すと夢みる所に、戸あけに來り、今少しと思ふ内、浣拭みなきえ、羽山の顔のみのこり眼あく。（昨夜、西洋料理其頃食にゆきしこと思し也。）

（『日記2』 p.440）

1904年の日記は、熊楠の日記の中でも異色を放っている。いわゆる「やりあて」や「幽霊」に関する記述もこの頃に集中して見られる。「やりあて」や「幽霊」、さらにマイヤーズの『ヒューマン・パーソナリティー』などについては第4章で詳述する。

1904年1月3日、熊楠はフレッチャー（大博物館で知り合った美少年）に髪を刈ってもらふ夢を見ている。このような夢を見たのは、最近自分の髪が伸びており、近々切りに行こうと思っていたからだという（内的・心的要因）。

同年5月21日の夢は、まるで連想ゲームのようである。熊楠は夢の中で、名草郡・鳴滝へ行く間の通り道は、町屋で、非常に長いと感じた。そしてそれは、漠然と本郷から白山王子に行く道中を思い出させた。鳴滝の寺へ参ると吉田聖天を思い出し、歩いていくと田辺の友人・目良氏宅とおぼしき所へ來た。その傍らには、ジャクソンヴィルで見た原野

のようなものがあつたようだ。そして、その原野では、キューバの田舎道を思い出したこともあつたと連想した。またハバナから港の東にある田舎へ行くとき、ちょうど白山王子への道を思い出したことがあつたという。この夢では、心に留まっていた記憶が「連想」によって次々となつていく過程が描かれている。そのプロセスを以下に示す。

鳴滝までの長い道—（連想）—本郷から白山王子への道中→鳴滝の寺—（連想）—吉田聖天→王子道・本通り→目良氏宅・傍らに原野—（連想）—ジャクソンヴィルの原野—（連想）—キューバの田舎道—（連想）—王子道

第1章・第2節でも述べたが、このような「複雑な連想の糸」（夢における事柄の不安定なつながり）とでも言うべきものは、熊楠によると、夢から覚醒した後、少しでも頭を動かすと、切れてしまうという。上記の夢も、熊楠は覚醒後、頭を動かさずにこの連想を記憶し、日記に書き付けたものと思われる。

同年5月27日の夢では、故・羽山蕃次郎と西洋料理店に行く夢を見ている。これは昨夜ちょうどこの時期に西洋料理店に行ったことを思い出したためだという（内的・心的要因）。羽山兄弟（繁太郎・蕃次郎）の存在が、熊楠を補完し安定させてくれる「アニマ」・「片割れ」だったことは第2章で述べた。羽山兄弟の夢を見た熊楠は、目覚めた後、どうしようもない孤独を味わったに違いない。羽山兄弟は死んでしまって、もうこの世にはいない。そして自分（熊楠）は今、生きている。「片割れ」の「死」を思うことで、熊楠は自らの「生」を痛烈に感じていたのではないだろうか（熊楠と羽山兄弟の関係の詳細については、第2章を参照のこと）。

#### 5-4, 1907年—亡父・母・妹—

〈1907（明治40）年の主な出来事〉（田辺に定住）

- ・ 前年（1906年）、田村松枝と結婚
- ・ 前年（1906年8月）、内務省で神社合祀の方針が示され、和歌山では12月に通牒が出される

・ 6月24日、長男・熊弥誕生

1907年3月27日[水] 雨

此朝予多屋鉄におだてられ甲冑乗馬し、矢ざまより銃うつを、下より槍を手にし登る。や声をかけると同時に一物痛きと覚えおくれれば、松枝予を起さんとする手当りし也。

(『日記3』 p.99)

1907年3月28日[木] 晴

朝松枝と二人、和歌山真砂町辺にぬし惣あるに着、中松盛雄氏居合す。ぬし惣にステキ等洋食ならべあるを高値也と松枝いひ来る。予も左様思ひ、共に■■■辺に行き、ハムにても食ひ帰り立退んと思ふ処にてさむ。以前にも夢に真砂町と延命院を連ね見しことあり。今年父歿して十五年になる故何となく心中に思出しと見ゆ。

(『日記3』 p.99)

1907年6月17日[月] 陰、夜雨

夢に、亡妹藤枝三味線ひく。(昨朝乞食門をひきあるきし三味線齋藤太郎左衛門といふ唄、亡妹常にさらえしものなり。)忽にしてなくなり、母にそのことをはなす内母又消る。父予に口臭き故洗ふべしといふと見てさめる。

(『日記3』 p.114)

1907年3月27日の夢で、熊楠は甲冑を着て乗馬をしていた。熊楠が掛け声をかけると同時に、一物が痛いと思ひ目が覚めた。すると、松枝が熊楠を起こそうとして手がそこに当たっていた(外的・物的要因)。因みに、熊楠は前年、1906年に松枝と結婚をしている。以降、熊楠の夢には松枝がしばしば登場することになる。また熊楠は、松枝が見た夢についても、よく聞き出し記録している(巻末付録 CD-R データベース資料参照)。

翌日3月28日には、松枝と真砂町辺りの旅館・ぬし惣に行く夢を見ている。中松盛雄(熊楠と同じ和歌山中学出身の旧友)もそこに居合わせ、中松は、ぬし惣のステーキ等の洋食が高値だと松枝に話しに来た。熊楠もその通りだと思い、■■■(不明文字。文脈から

考えると「延命院」であろうか)の辺へ行き、ハムを食べて帰ろうとするところで目が覚めている。延命院には父・弥右衛門の墓がある。熊楠はこの夢の原因は、父が亡くなってちょうど15年になることを何となく心の留めていたためだろうと考えた(内的・心的要因)。

同年6月17日には、早くして亡くなった妹・藤枝の夢を見ている。藤枝が三味線を弾き、そして亡母にそのことを話すという夢である。これは以下のような「内的・心的要因」が原因となったものであった。昨日の朝、乞食が三味線を弾きながら歩いていた。その唄は『斎藤太郎左衛門』という、藤枝がいつも練習していた唄だったという。この出来事が心に残り、夢に影響を与えたのだった(内的・心的要因)。

ここまで見てきても分かるが、熊楠は、夢の原因・理由を執拗なまでに追究しようとしている。その理由は、現実の世界においては、対象との関係が極端に「近い」か、極端に「遠い」かのどちらかであった熊楠による、「中間」を求めての狂奔だったようにも思える。つまり熊楠は、夢の考察を通じて、自分が「現実界」の出来事(対象)と接触できている(関係が持っている)ことを確かめようとしていたのではないだろうか。夢は、現実世界の「外的・物的要因」が睡眠中の精神(心)に接触して、あるいは、現実世界での出来事において記憶に残った「内的・心的要因」が睡眠中の脳(物)に影響を与えて起きるものである。いわば、自己(心)と対象(物)が適度に交わって現出する事柄なのである。夢を見るということは、ある意味「中間」(適当な距離)に居る、ということでもある。現実世界において、「中間」を保てなかった熊楠は、夢の考察をもって「中間」を追究(追求)していたのである。夢と現実が混濁することの多かった熊楠にとって、我々にしてみれば本当に何気ない夢は、自分が「中間」に居るということを実感するための、特別な意味を持つものだったのである。

#### 5-5, 1908年—松枝の夢—

〈1908(明治41)年の主な出来事〉

- ・ 4月9日～7月、夫婦不和。松枝、実家に帰る
- ・ 11月17日～12月2日、熊野採集行を試みる

1908年3月14日[土] 晴

妻夢に、ゆかの下に狸ありて「チョコ六さん、化するか」とくりかえすを（これは予等毎度小児にいふ詞、チョコ六といふ猫かひしより出）予松枝に知せ、松枝之を聞きて諸処戸じまりすと見る中に、なき出せしなりと。鳥半といふ男東神社にて狸殺し神経病になれる由、予頃日下女に話せしことあるを、何となく松枝聞しならん。

（『日記3』 p.165）

熊楠の夢の記録は、自身の夢のみならず、家族の夢にまで及んでいる。後には女中の見た夢まで聞き出して書き残していることがある。1908年3月14日の夢は、妻・松枝が見たものである。松枝は床の下に狸がいる夢を見ている。「チョコ六さん、化するか」と床の下の狸は繰り返し言ったようだ。因みにチョコ六とは、熊楠が飼っていた猫の名前（いつ何時飼っても名前はチョコ六だった）で、これは生まれたばかりの息子・熊弥の愛称として引き継がれている。松枝は熊楠に言われ家中の戸閉まりをした。この夢の原因は、熊楠が最近、女中に「鳥半という男が東神社で狸を殺して神経病になった」という話をよくして、それを何となく松枝も聞いていたからだろう推測している（内的・心的要因）。

#### 5-6, 1910年—本・雑誌からの影響—

〈1910（明治43）年の主な出来事〉

- ・ 6月～7月、大逆事件、田辺に波及
- ・ 8月21日、県史への面会を求め、夏季講習会へ乱入（8月22日拘引、23日～9月7日まで入監）
- ・ 10月3日、『牟婁新報』掲載の「人魚の話」が風俗壊乱罪に問われ、罰金刑を受ける
- ・ 10月24日、大学予備門の同窓・山田美妙（武太郎）死去。日記にその死を記し、悼む

1910年5月1日[日] 晴、夜雨

終夜幾度も同じ夢みる。一人来りたむしを直すべしとてとまり飲食せし後、竜となり登天し去る。これは此頃虬及野槌の事古事記伝につき調べ居し故なるべし。

(『日記3』 p.355)

1910年12月29日[木] 晴

悪鬼多く来り予を苦むと夢む。これは大毎に徒刑人鉦山にて苦役の事をよみし故也。

(『日記3』 p.412)

1910年5月1日、熊楠は一夜に何度も繰り返す同じ夢を見ている。誰か一人がやって来て、「タムシを治してやろう」と言って(熊楠宅に?)泊まり、飲食した後、龍となって天に登って去っていくという夢である。これは、最近、虬と野槌について、『古事記伝』を調べていたからだという(内的・心的要因)。確かに、同年7月と11月に『東京人類学雑誌』に掲載された論考「本邦における動物崇拜」に、虬と野槌に関する記述が見られる。虬も野槌も神格化された大蛇の類である。虬は水の主、野槌は野の主という意味だという。熊楠はこの雑誌への投稿の為に、龍にも似た虬と野槌を調べていたのだ。それが心に強く残り、夢においても見たのであろう。

同年12月29日、熊楠は悪鬼が多く来て苦しめられるという夢を見ている。これは『大阪毎日新聞』で、徒刑人が鉦山で苦役を強いられている記事を読んだためだという(内的・心的要因)。

我々も熊楠と同様、日中に読んだ書物の内容などを、夢で見ることはある。しかし、熊楠が我々と異なる点は、その夢がしばしば強烈なリアリティーを持っていたことにある。時に熊楠は、今自分が経験したことは、夢か現実か区別がつかないということがあった。第1章・第3節でも述べたが、例えば、熊楠は、「中学校の新入生らしき者たちが、大事な書籍や標本箱の前を走ったり荷物を置いたりして大変困った」という夢を見て(1923年5月28日付日記参照)、目が覚めた後もしばらくの間怒りが収まらなかったり、「夢うつつ」の状態で危うく友人を斬りつけそうになったり(1905年3月18日付日記参照)している。熊楠は、現実と夢の境界線が極めてもろい人間だった。覚醒時における情報は夢へどんどん流れ込み、逆に夢の出来事は現実へとどんどん流れ込んだ。流れを堰き止め

る壁は極めてもろかった。あるいは透過性のあるものだった。だから、現実と夢は区別がつかないほど曖昧なものになったのである。熊楠は、この曖昧なものにはっきりとした区別を設けたかった。つまり、熊楠自身の居場所（ポジション）をはっきりと確定したかったのである。

5-7, 1911 年—ロンドン時代の夢／雷様の原因—

〈1911（明治44）年の主な出来事〉

- ・ 3月21日、柳田国男より来信。以後文通が続く（～1917年）
- ・ 9月、柳田が『南方二書』を識者に配布する
- ・ 10月13日、長女・文枝誕生

1911年7月30日[日] 雨

此朝予夢に、ロンドン、ノースエンドロード（大英類典にて地図につき昨日見出す）と思しき所にて、猶太人如き奸譎のパン屋へ物買ひに行しに、奸詐の所作あり、因て其店の前主人と相識れる由を弁すと夢む。話しは悉く英語を用ゆ。

（『日記4』 p.67）

1911年9月21日[木] 大雨、夕雷鳴明朝迄止まず

三時過頃大雷なる。松枝叫び、さめる。予夢に、雷公叫びながら走り始と見てさめしに、ヒキ六踊り上り、身を屈して臥す。

（『日記4』 p.81）

1911年7月30日、熊楠はロンドンのノースエンドロードとおぼしき所にある、ユダヤ人が経営しているパン屋へ行く夢を見ている。このユダヤ人はどうも怪しい人物で、何か詐欺のような所作をしたので、熊楠は「自分はここの前の主人を知っている（から言いつけてやる）」ということを書き放っている。会話はすべて英語だった。熊楠によると、このノースエンドロードは、昨日『大英類典』の地図で見えていたから夢に出てきたのだとい



う（内的・心的要因）。熊楠は、約15年間、アメリカ・キューバ・イギリスと渡り歩いたが、帰国後、夢に見るのは、イギリス・ロンドンにまつわるものばかりであった。それだけ熊楠にとって、ロンドンという場所が、そして大英博物館に通い詰めた日々が、印象深いものだったのであろう。

同年9月21日は、終日大雨だった。雷が鳴る嵐だったようだ。熊楠は夢で雷様が叫びながら走り始める様子を見た。目を覚ますと、ヒキ六（熊弥の愛称）が雷に驚き飛び上り、身を屈して臥せていた（外的・物的要因）。因みに熊楠は、熊弥が見た夢に関してもしばしば記録している（巻末付録 CD-R データベース資料参照）。

#### 5-8, 1912年—飛翔の夢他—

〈1912（明治45・1月～7月29日、大正元）年の主な出来事〉

- ・1月、中華民国成立。孫文が臨時大総統となる（4月に辞任）
- ・2月9日、白井光太郎に「神社合祀に関する意見」を送る
- ・9月15日、乃木希典が殉死

1912年3月1日[金] 陰

昨日大毎にて（二月二十八日分）尾張家騒動の記に、太田園三といふ男、柳橋の柳湯で芸妓の入湯をのぞく所あり。予之を讀しが、今朝夢に或る家の庭に下女多く乾物する所を隣家より男子（職人）多くのぞき、予之を咎め隣家に打入り、一人を捕へ詰問す。其所へ阿波辺の人来り長く議論し、巡査に引渡すと夢る。下女隣室で聞居しに、久しく寝言で議論し居たりと。

（『日記4』 p.128）

1912年3月17日[日] 雨

此曉、予松枝二児すておき福惣へかえりあるを、雜賀貞次郎等とつれ、よびに之き、大に理屈いふ。其声耳に入り、さめる。これは昨夜楠本等と本月十四日雜賀妻娶りし話せしによる。雜賀曾て、去年秋津川の人、妻に逃られしを憤り、其男を殺せし話せ

し。

(『日記4』 p.133)

1912年9月10日[火] 晴

九月十日朝夢に亡母にあふ。さめて母己に此世になきに気付く内、往年片岡政行と汽車にのりしとき通りし如き地（ワヅオース辺）如き所、汽車で通り何れえか往く。汽車中で誰か予を嘲弄す。予、福本日南の「出て来たか」に予天下一のへどの名人とあるを知らずやと詰る。一人あり、黒き羽織きたる浪人様のもの、予に賛成す。（宮永剛太郎氏と思ふ。）予と親しくなり、色々話する内、汽車停車場に着く。其人の父来る。父といはねど其人に似たり。色赤黒く髭あり。鼻甚高く大也。（これは昨夜油岩で藤木八平氏の鼻のことをいひしによる。）其人予のカバンに鍵入れるをもち、プラットフォームに先下り往く。予汽車中より之を見て、彼者は予をかたらんとてかくなせることと思ふ。此さとりと共に夢さむ。思ふに夢忽ちさめんとするとき *dénouement* を早くし、全局を結び、脚色をあらはす也。其間の時間は至て刹那なるべきか。小説を読で一篇の趣向の了るとき小説終る如し。

宮永氏等と船中で絶交せしも、<sup>(F)</sup>上船の際は水くさき別れをなせしなり。氏のこと前日森本氏への状にかきしことあり。

(『日記4』 p.188)



写真6

1912年11月21日[木] 晴

夢に何度も／＼神通力を得て、臥しながら空中を飛翔す。（四日前着 *Notes & Queries* に予の文 *Legends of Flying* 出、此事のせたり。）委細をくわしく覚え居しが、一睡の後忘れおはる。さめて後思出し、空中飛翔は容易のことなるに、何故他人が出来ぬかと思ふ。扨寤てみるに、昨夜剃髪し、頭丸坊主なる、此処を（Webster の字書骨相図に *Love of Approbation* とある処ろ）松枝のまくらにあて、なれぬこと故大にすり、多少痛み麻痺しあり。右は出所ある夢なり。

扨本日の大坂毎日見るに、森田新蔵氏飛行機工夫で失敗、やけになりある

ことを詳報せり。これは偶合なり。

(『日記 4』 p.208)

1912年 12月 25日[水] 晴 寒

ヒキ六朝起て、赤き長き（勢高）人來り角力とると夢むといふ。昨日山口鶴吉の子來り角力とりし故也。予は松枝涅齒せると夢む。

(『日記 4』 p.215)

1912年 3月 1日、熊楠は隣家の「のぞき犯」を懲らしめようとする夢を見ている。夢の中で、熊楠は相当エキサイトしていたのだろう（やはりここからも、熊楠が非常にリアルな夢を見ていたことが覗かれる）。目覚めた後、女中に聞くと、長い間寝言で議論をしていたとのことだった。この夢は、昨日、『大坂毎日新聞』に「尾張家騒動」の話があり、その中で太田園三という男が芸妓の入浴をのぞく場面を熊楠は読んでいたため見たのだった（内的・心的要因）。

同年 3月 17日の夢は、熊楠が妻・松枝と二児（熊弥と文枝）を捨てて出ていくというものである。ここでは雑賀貞次郎（熊楠の晩年の高弟）も登場する。熊楠はこの夢でもエキサイトし、「大に理屈いふ」自分の声で目が覚めている。これは、昨夜友人の楠本秀夫（秋津に住む画家。雅号：龍仙。熊楠は 1921年の晩秋に楠本を伴って高野山へ行き、約一ヵ月滞在して、菌類の採集や写生を行った）らと、雑賀が妻を娶ったという話をしてきたからだという。また雑賀は、前年、秋津川の人が妻に逃げられ、男（妻の不倫相手か）を殺した話をしてくれたことがあったが、これもどうやらこの夢に関係があるようだ（内的・心的要因）。

同年 9月 10日、熊楠は亡母の夢を見ている。目覚めて母は既にこの世にはいないことに気付いたようだ。その内また眠りに入ったのであろう。今度は昔、片岡政行<sup>4)</sup>と汽車に乗ったときに見たような所を通り、どこかへ行く夢を見ている。汽車の中で誰かが熊楠を

---

<sup>4)</sup> 熊楠がロンドンで交友を交わした人物。愛媛県宇和島出身で、ロンドンで東洋骨董店を開き、イギリスでの「ジャポニズム」の幕開きに大きな役割を果たした。自ら「プリンス片岡」と名乗り皇族を詐称したり、軍服が好きで海軍大佐（キャプテン）と偽ったりもしていたという。【飯倉 2006:99 参照】

嘲笑した。熊楠は、福本日南<sup>5)</sup>が書いた『出てきたか』に自分が天下一の「反吐の名人」とあるのを知らないのかと問い詰めた。そうすると、黒い羽織を着た浪人のような男・宮永剛太郎（熊楠がロンドンから帰国の際、船中で同室だった人物）とおぼしき者が熊楠に賛同した。熊楠はこの男と色々話をし、仲良くなった。駅に着くと、その男の父と思われる人が来た。鼻がとても高くて大きかった。熊楠は、これは昨夜、油岩（広畑岩吉）<sup>6)</sup>のところ藤木八平（熊楠が当時住んでいた家の家主）の鼻のことを話したことが心に残っていたからだと考えている。夢はまだ続き、その人は熊楠の鍵の入ったカバンを持ってプラットホームに足早に下りていった。熊楠は汽車の中からこの様子を見て、「彼は最初からカバンを盗むのが目的で自分に付け入ってきたのだな」と思った。そう思うと同時に目が覚めた。このようにして怒濤の如くこの夢のおち<sup>7)</sup>は付けられた。熊楠は、夢から覚めるとき、結末はある種強引にやってくるがあると述べている。急に全局を結ばなければならなくなり、時に（無茶な）脚色が加わることもあるという。そして、その夢の急な結末（denouement）までの時間は刹那であるという。夢における「空間」は曖昧であることは以前の考察で分かったが、どうやら「時間」も曖昧であることを、熊楠は確信したようだ。夢において、「空間」や「時間」が曖昧なのは当たり前だと考える我々とは違い、熊楠にとって、それは非常に重要な事柄であった。つまり、現実の世界と夢の世界を明確に分ける為に、熊楠は、両者の特徴をしっかりと擱<sup>8)</sup>んでおく必要があったのだ。

熊楠と宮永は、ロンドンから帰国の際、船中で喧嘩の末絶交したが、下船のときは少々水臭い別れを惜しんだという。そして熊楠は、その宮永のことは先日森本氏へ送る状の中に書いていたが、それが頭に残っていたのだろうという。つまり宮永が夢に出てきた原因の一つは昨夜、油岩で藤木八平氏の鼻のこと（宮永も鼻に特徴がある人物だった）を話し

<sup>5)</sup> 新聞記者。のちに『九州日々新聞』の社主を経て衆議院議員となる。1898年から1900年までロンドンに滞在し、すでに面識のあった熊楠と再会した。1910年7月15日～20日の『大阪毎日新聞』に、その時の熊楠との交遊を描いた「出てきた歟」を連載している。この「出てきた歟」は、熊楠についての日本でほぼ初めての紹介であり、以後、彼のイメージを決定づけた観のあるエッセーである。いわく、何か国語かを操り、英国で学者として認められていたこと。またいわく、毎日酒を浴びるほど飲んでたこと。反吐を自由自在に吐くこと。さらに「その穢<sup>9)</sup>ないことといったら、無類突飛」の部屋に籠もって大勉強をしていたこと。もちろん博物館追放事件に関して、「露西亞人の鼻をかじったから」という、当時の国際関係を意識したかと思われる捏造も含まれているが、そうした「南方伝説」のはしりのような部分も含めて、ロンドン時代の熊楠の生活を活写した好篇となっている。[松居他 1993:241-242]

<sup>6)</sup> 屋号：油岩。岩吉は末生流生け花の指導と看板絵、紋描きをして生計を立てていた。早く妻に先立たれ五人の子を男手一つで育てながらも、持ち前の陽気さで人々の会所となっていた。風呂屋に近かったせいもあって銭湯帰りの熊楠もよく立ち寄り、話を楽しんだ。尽きることのない広畠の話題に「こんなことには二本足持つ百科全書ともいべき人」と熊楠も三嘆している。[松居他 1993:329 参照]

たことが心に残っていたからであり、もう一つは森本氏への状に宮永のことを書いたからであった。二つの「内的・心的要因」が交差して夢となったのだ。

同年 11 月 21 日の夢は、「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が複雑に混じりあうものとなっている。熊楠は神通力によって、臥しながら空中を飛ぶ夢を見ている。これは四日前に届いた『ノーツ・アンド・クエリーズ』に熊楠の“Legends of Flying”という論考が掲載されたことが心に残っていたからだという。因みにその論考では、歩くようにして飛ぶ仏や直立したまま飛ぶ仏、地平に水平になりながら飛ぶ仏などについて書かれている。目覚めて夢の内容を反芻してみると、夢の中で熊楠は「空中浮遊は簡単なことなのに、なぜ他の人々はできないのか」と不思議に思ったという。目覚めた熊楠は後頭部の一部（この部位は *Webster* の辞書の骨相図には‘Love of Approbation’＝「賞賛愛」、つまり他者からの賞賛を求める箇所とある〔写真 7〕）が多少痛み、痺れていた。熊楠はこの後頭部の痺れはどうも飛翔の夢と何かしら関係があると考えていたようだ（そうでなければ、わざわざ夢の内容の後にこのような覚醒時の状況を書く必要はない。熊楠は丁寧にも図まで描いているのだ〔図 6〕）。これは推測であるが、「臥しながら空中を飛翔す」とは、いわゆる「涅槃のポーズ」で飛翔するというのではないだろうか。“Legends of Flying”には、仏陀が‘posing himself horizontally’によって飛翔することが述べられているが、これはつまりは「涅槃のポーズ」で飛翔することではないだろうか。そうであるならば、熊楠の後頭部の一部（Love of Approbation）が痺れた理由も合点がいく。熊楠は夢の中で、後頭部の一部に手を当てたまま横になって飛翔したと考えられる。

まとめると、

- ・「内的・心的要因」＝“Legends of Flying”の記憶
- ・「外的・物的要因」＝枕に頭をこすり後頭部が痺れた

ということである。これらが影響しあって、熊楠は飛翔する夢を見たのだ。

さらに注目すべきは、目覚めて後、『大阪毎日新聞』を読むと、森田新蔵（民間飛行機の草分け的人物。単葉機を自作した）が飛行機実験で失敗した記事が載っていたことである。飛翔の夢の後にこの記事を読んだ熊楠は「これは偶合なり」と偶然の一致を驚いている。これは「正夢」に類するもので、いわば「やりあて」と言っても良いであろう。この「偶合」（やりあて）は、「外的・物的要因」や「内的・心的要因」などでは、原因を追究する

ことはできない。熊楠の身に、しばしば起こったこのような「偶合」は、彼の心を捕えて離さなかった。それは、「夢」とは位相の異なる、もう一つの〈夢〉として、熊楠の研究対象となっていた。「夢」とは、「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が交わる「中間」領域における事柄だが、〈夢〉とは、生と死、この世とあの世の〈中間〉たる「通路」における事柄なのである。〈中間〉においては、自己と他者の区別は不鮮明になる。そこでは、両者は混在し（混じり合い）、時に「交感」（ノンバーバルな交流）が行われるようだ（第4章・第16節参照）。

**phrenology.**  
**phre-nol'o-gy** (-jī), n. [*phreno-* + *-logy*: cf. F. *phrénologie*.] The hypothesis of F. J. Gall (1758-1828) that mental faculties and traits of character are shown by the conformation of the skull, or the system of faculties and their localization based on this hypothesis. It was based on the erroneous supposition that the brain exactly conforms to the shape of the skull. See BRAIN, 1; cf. PHYSIOGNOMY.

A Chart of Phrenology. 1 Amativeness; 2 Philoprogenitiveness; 3 Concentrativeness; 3a Inhabitiveness; 4 Adhesiveness; 5 Combativeness; 6 Destructiveness; 6a Alimentiveness; 7 Secretiveness; 8 Acquisitiveness; 9 Constructiveness; 10 Self-esteem; 11 Love of Approbation; 12 Cautiousness; 13 Benevolence; 14 Veneration; 15 Firmness; 16 Conscientiousness; 17 Hope; 18 Wonder; 19 Ideality; 19a (Not determined); 20 Wit; 21 Imitation; 22 Individuality; 23 Form; 24 Size; 25 Weight; 26 Coloring; 27 Locality; 28 Number; 29 Order; 30 Eventuality; 31 Time; 32 Tune; 33 Language; 34 Comparison; 35 Causality. [Some raise the number of organs to forty-three.]

先にも述べたように、熊楠の夢の研究は、家族や女中が見た夢にも及んでいる。家族や女中の何気ない夢が多い。「極端人」熊楠にとっては、自分以外の他者が見る夢というものも、非常に大切な研究対象であった。比較対象が無ければ当然、自分が果たして正常なのか異常なのか知ることはできないのである。

同年12月25日には熊弥(ヒキ六)が見た夢を記録し

写真7 “WEBSTER'S NEW INTERNATIONAL DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE”

PUBLISHED BY G. & C. MERRIAM COMPANY, 1920, p.1626 (下線と○印—唐澤)

ている。熊弥は、赤き長き（背の高い）人が来て相撲をとる夢を見たという。熊楠によるとこれは、昨日、山口鶴吉の子が来て相撲をとったのを見たからだと述べている（内的・心的要因）。

因みに、熊楠はこの年（1912年）、ロンドンで親交のあった孫文<sup>7)</sup>（1866～1925年）の夢を二回見ている。

1912年4月10日[水] 晴

此朝孫逸仙と予と桑港と覚しき地にて久く伴ひ共に遊歩し、写真とりにゆくと夢む。

（『日記4』p.139）

1912年5月27日[月] 陰、風

此暁、日高郡とおぼしき処へ採集に人つれ行く。鈴木達三氏来り、又来れといふ。又停車場如き所に孫逸仙きれいに髪分けてあり、一別来の事英語にて話すと夢む。

（『日記4』p.153）

この年の1月に中華民国が成立し、孫文が臨時大総統となっている。孫文は、その後4月に辞任することになるが、この事件は当然熊楠の耳にも届いていたはずである。この事件が、上述した熊楠の夢に影響したことは、ほぼ間違いないであろう。

#### 5-9, 1913年—大山神社合祀遺憾の念／『大英類典』の影響—

〈1913（大正2）年の主な出来事〉

- ・ 3月22日、松枝が路上で羽山季（羽山兄弟の末妹）と知り合った話を熊楠にする

<sup>7)</sup> ロンドンでの熊楠と孫文の交わりは、明治30年3月16日から6月30日までという短い期間だったが、密度は極めて濃いものであった。日記には三日と置かず孫文の名が出てくる。話は万般にわたったようで、英文「燕石考」の中にも、中国の子どもの「酔貝遊び」についての孫文の意見が引用されているほどである。孫文がロンドンを去る際、熊楠の差し出した日記帳の1ページにしたためたのは「海外逢知音」の言葉であった。孫文にとって熊楠は、まさに海外で得た最も良き理解者・共鳴者であったに違いない。明治33年12月、熊楠の帰郷を横浜で知った孫文は、何通も書簡を送って再会を熱望した。明治34年2月10日の書簡では、熊楠の返事も待たずに和歌山に来てしまうほどの熱意であった。こうして2月14・15日の両日、両人は再会し歓談する。別れにのぞんで熊楠は二人の弟をよんで記念撮影をした。[中瀬・長谷川 1990:64,66]及び[松居他 1993:253 参照]

- ・ 7月15日、16日、羽山季、一時郷里（日高郡塩屋村）に帰るため暇乞いに来訪する。  
以後、再び羽山家との交際が始まる
- ・ 11月13日、『不二』掲載の「月下氷人」が風俗壊乱罪で罰金刑を受ける
- ・ 12月30日～31日、柳田国男が来訪する

1913年10月13日[月] 陰

夜松枝そばに臥し居る内、夢に古田幸吉来り、大山神社合祀遺憾の由いふ。それより山路辺へ之、松枝と臥す内、松枝おそはれるを八度斗りおこす。八度目に声きこえ、松枝予をつきおこす。予眼さめ見れば、胸と腹の間に左手おきあり。自分おそはるゝを人おそはるゝと夢見し也。

(『日記4』 p.309)

1913年10月14日[火] 雨

此夜予ひとり臥し居る夢に、岡田満？来るを、豪猪に化し（昨夜大英類典豪猪の条読り）新座敷の椽下に隠んとするに、いかにして開くべきかを不知、問んと妻を呼ぶこと七八度にして、妻によびおこさる。次に又茶をくれといふこと七八声にして、下女ほんとで有うかと妻にとふをきゝ、大に怒る。扱茶もち来れば、手にとり飲ねど飲だ心地するなり。ヒキ六及文枝大におそれ居る。

(『日記4』 p.310)

1913年10月13日の夢では、親戚の古田幸吉<sup>8)</sup>（1879～1951年）が来て、熊楠の祖先の産土神を祀っている、大山神社が合祀されてしまったことに対する遺憾の由を熊楠に述べている（この時期、古田と熊楠は大山神社の合祀反対についてしばしば書簡のやりとりをしている。しかし古田と熊楠の努力も空しく、1913年10月11日に大山神社は合祀されてしまう）。それから山路辺へ行き、松枝と共に臥している。そこで松枝はうなされてい

<sup>8)</sup> 古田幸吉は、熊楠の父弥兵衛の弟善兵衛の四男として明治12年に生まれた。若いとき和歌山に出て南方酒造に勤めたが、家兄の渡米により帰郷して家をついだ。大山神社の合祀反対では熊楠と協力したが、古い村の体制のなかで、ついに苦汁をなめた。村会議員であり、歌人であり、夏蜜柑の栽培を村にひろめるなど篤農家でもあった。昭和26年死去。[中瀬・長谷川 1990:126]



た。熊楠は心配になって松枝を八度ばかり起こそうとしている。しかし、実際は（現実では）どうも熊楠がうなされていたようだ。寝ている熊楠を、松枝は揺り起こした。そして熊楠は目を覚ました。夢の中では他人がうなされていたのに、現実には自分自身がうなされていたのだ。熊楠はしばしば夢の中でうなされている。熊楠は「なぜ人がうなされるのか」ということに関心を示し、いくつもの記録を残している。この夢では、目覚めると、自分の胸と腹の間に左手を置いていたという。夢の中で熊楠は、うなされる松枝の胸と腹の間に手を置いて起こそうとしたのであろうか（外的・物的要因）。

同年10月14日の日記には、熊楠が夢から覚めてもまだ現実との区別がついておらず、朦朧とした状態が描かれている。夢で岡田満（友人か）らしき人物が猪に化けて新座敷の椽下に隠れた。椽下を開ける方法が分からず、松枝を七、八度呼んでいる。この時も、前述の日記と同じく、熊楠は声を上げてうなされていたようだ。そして熊楠は、松枝に起こされている。起きた熊楠はまだ夢と現実の区別がつかない朦朧とした状態であった（第1章・第3節参照）。「お茶をくれ」と七、八度言うと、女中が「今度は寝言ではなく本当の言葉だろうか」と松枝に聞いている。熊楠はこれを聞いて激怒しているが、実際にお茶を手にしても、飲んでいないのに飲んだ心地がするという朦朧状態であった。また、猪の夢を見たのは、昨夜『大英類典』で豪猪の項目を読んでいたためだという（内的・心的要因）。

現実において、お茶を手にして、飲んでもいないのに飲んだ心地がするとは、一体どういうことであろうか——。ここには、熊楠の、現実と夢とが、もはや区別が無くなる程、合わさってしまっている状態を見てとることができる。熊楠は、現実においてお茶を手にしなが、夢においてお茶を飲んでいたのであろう。自分が今居る「場所」が一体どこなのか——現実なのか、夢なのか——熊楠には分からなくなっていた。そのような「ポジション」の不確定は、居心地の悪いものである。しっかりとした「足場」を求めて、熊楠は、夢と現実の区別を凶っていた。そのために、夢の特徴というものを確認する作業は、熊楠にとって非常に重要なことだったのである。

ここまで（1913年）が、現在刊行されている『日記1～4』（八坂書房）からの抜粋である。1914年以降は、1919年の日記（『熊楠研究6～8』）を除き、未刊行のままである。未刊行分の日記における夢の記述に入る前に、熊楠の夢と「事の学」の関係を小括しておきたい。

## 第6節、小括

熊楠の日記における夢の記述の目的の一つは、夢の因果を探ることであった。一見すると夢においては、何の脈絡もなく、現実では考えもしないような事柄が起こるように思われる。しかし熊楠は、そこには何か必ず原因があると考えた。

熊楠の夢の考察は、まず「外的・物的要因」の探究から始まる。熊楠は、夢から覚めた後、冷静に周りを見渡し、そこに不可思議な夢の原因の端緒を見て取った。例えば、目を覚ますと、壁に反射した日光が目にあたっていたり、シーツが身辺に裏返ってまわりついていたりにしていた。その結果、白帆や霧などが夢において現出した。つまり熊楠は、「外的・物的要因」が睡眠中の身体に影響を与えた結果、人は夢を見ると考えた。

しかし、夢を見る原因はそれだけではない。人は、「内的・心的要因」によって夢を見ることもある。日中の記憶や昔の思い出が夢の中でも反芻されるのだ。しかし、その記憶や思い出は、単にそのまま繰り返されるのではなく、脚色が変わり、時に地理などは連想が連想を生み、合成されて現れることもある。

「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が交わって、さらに複雑な夢となることもある。例えば、「外的・物的要因」である雨音が睡眠中の耳に入り、「内的・心的要因」である昔の川下りの思い出と交わって夢となることもある。しかし熊楠は、夢の現出において、「物」と「心」のどちらか一方を優位に立たせて考えることはなかった。熊楠は、「物」と「心」が交わり合える（互いに誘発し合える）場に関心を示し、そのような場、そしてそこに現出する事柄を「事」と呼んだ。「事」（例えば夢という場）があるからこそ、「物」と「心」は関係し合えるのである。

そして、このような考察から熊楠は「事の学」を構想するに至る。物的要因と心的要因が交じわり合う「事」は、まさに夢と同じであった。熊楠は、夢（事）を探究することで、「物的要因」「心的要因」の関係をより深く知ることができると主張した。言い換えるならば、他者（物）と自己（心）の「距離」の在り方を、熊楠は知ろうとしていたのである。両者がどの程度交わるとき夢は現出するのか、そもそも両者を成り立たせている「場」とは何なのか——。現実世界（現実生活）において、自己と他者の「距離」を適度に採るこ

とのできなかった熊楠にとって、両者がうまく(あるいは適度に)交わって現出する夢(我々にとっては何気ない夢)は、まさに「不思議」の対象であったのだ。

夢においては、「空間」や「時間」の観念が非常に曖昧になる。夢においては、全てが現実のように、三次元的に現れることもなく、また東西南北の方角も現実と同じではない。

「時間」を無視して急速に夢の内容は終局(denouement)を迎える場合もある。これが夢の特徴でもある。特に「空間」認識において、熊楠は夢と「幽霊」とは、確実に区別できると考えた。夢における「空間」・「時間」観念が、現実と異なるということは、我々にとってはごく当然のことだと思われる。しかし、熊楠の場合、夢と現実における、これらの相違を明確にしておかなければ、夢と現実は不鮮明なものになりかねなかったのである。両者の境を不鮮明なまま生きていくことは、この「社会」においては非常に辛いものである。なぜなら「常識」という最も曖昧だが最も信頼されているものによって、「異常者」とみなされてしまうからである。

熊楠は、「覚醒時の状況」という「外的・物的要因」と「夢の出所」となる「内的・心的要因」を記録することで、夢という現象の解明を目指した。そしてこの方法は、神話や伝説の研究にも応用できると考えていたようだ。それは熊楠による以下の文章(「燕石考」)を読んでも明らかである。

But in its deed, the myth only vies with the dream in its causes, often too multifarious and too complicated for entitling us to disentangle whatever antecedent from what were superadded to them later on; whilst some of these causes have acted and reacted repeatedly upon one another as a cause and effect; and the others now have entirely lost visible traces in their combined resultant. Much precautioning myself with these more or less unavoidable difficulties, I will now recapitulate the above-given arguments, and pronounce the following as a very approximate truth put in a readable sequence.

[1903年3月31日 “The Origin of the Swallow-Stone Myth”] (『別巻1』p.16)

(傍線—唐澤)

しかし全くのところ、伝説はその原因があまりにも多様で複雑な点で、またそのため先行するものを後になって追加されたものから解きほぐしにくいという点で、まさに夢に匹敵するものである。ところで原因のあるものは、くり返し果となり因となって、相互に作用しあう。そして原因の他のものは、組み合わされた結果のなかにとけこんで、目に見えるような痕跡を全く遺さないのである。このように多少は避けがたい困難を十分に自戒しつつ、上述の議論を概括して、なるべく真実に近いものを、読みやすく筋道だてて以下に述べてみよう。

[岩村 1979 : 371] (傍線—唐澤)

上記は、第1章・第2節でも引用したが、これを読んでも分かる通り、熊楠は、夢の考察方法を、伝説や神話の研究にも応用できると考えていたようである。

「事」には原因がある。「事」こそ日常における人間の行為の根本でもあり、両者が交わる「場」でもある。物理現象や心理現象のみを別個・バラバラに分析することに何の意味があるか。光の熱量だけを数値で表すことだけが本当の学問か。欲求などの生理現象を分析判断することだけが本当の研究か。そうではなく、両者が交わった処にこそ人間の営為がある。人間の思考の背景がある。そして、両者を交わらせる「場」がなければ、夢は現出し得ない。まずは、この「場」の考察が必要なのだ。熊楠は、そう考えていた。

しかし筆者には、熊楠が「事」を追究した本当の理由は、両極に揺れ動く自身の不安定な「ポジション」を、「事」という「中間」(適当な距離)に位置付けたいという、切なる願いがあったからのようにも思われるのである。そもそも、心(自己)と物(他者)が、交わることができる「場」とは一体何なのか——その答えを求めて熊楠の「夢の採集」は続いていく。

## 第7節、夢の原因を探る2

### 7-1, 1914年—足への影響が及ぼす夢他—

以下は、1914～1925年及び1941年の日記に見る夢の記述である。1914年以降の日記

は、未だまとまった形では発刊されていない。以下の日記の記述は、南方熊楠顕彰館内のマイクロフィルムと、故・岡本清造氏が翻刻したものを参照にした。

〈1914（大正3）年の主な出来事〉

- ・ 1月、『太陽』に「虎に関する民俗と伝説」を掲載する。以後10年間、各年の干支の動物について論考を発表する（いわゆる「十二支考」）
- ・ 6月28日、第一次世界大戦勃発（～1918年）
- ・ 7月8日、孫文、東京で中華革命党を結成

1914年5月4日[月] 快、夜一時頃より雨 冷

朝羽山直記氏宅を訪ふと夢む、途上古井戸に墜ると夢む、眼さめ見れば、右の足たびぬぎ、片足たびはきあり、一足寒き故一足もて古井戸に立てりと思ひしか、

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）

1914年9月17日[木] 晴、朝雨雷鳴

朝雷鳴、予眠り居り、夢に長島氏父と争論す、長島父立ながら罵る、頭の後に日光如きもの惣ち去る、これは長島父母昨日大喧嘩せし也、（今朝も右夢みる中にせしか）又日光は此夢みる中電光りしか、又は昨夜強電光見し故か、

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）

1914年10月5日[月] 晴 涼

朝、常楠妻一同と水盃し、白装束と夢む、それより家人一全予に服せず、打ちにくる予翼生じ、町へ飛出、家の人をおどしまはると夢み、自分の大聲で人をおどす声をおどす声耳に入り、さむ、さめて見れば、両脚の下端痺れあり、足痺れたるとき、飛ぶ夢見るにや。又予従来人や物におどされ、魘はることなし、いつも人をおどす自分の聲にてさめる也。

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）

1914年5月4日、熊楠は羽山直記<sup>9)</sup>宅を訪れる途中、古井戸に落ちる夢を見ている。落ちた古井戸の中で、熊楠は片足で立っていた。——目を覚ますと、右足の足袋だけが脱げていたという。結果、右足が冷え、古井戸の水の中に片足で立っている夢となったのだ(外的・物的要因)。因みに、羽山直記とは羽山繁太郎・蕃次郎らの父である。直記は、日高郡塩屋村の医者であった。

同年9月17日の夢は、近所の友人・長島一〔肇〕の父と論争をするというものであった。長島父には、後光のようなものが輝いていた。しかし、それはたちまち消える。この夢の原因を、熊楠は、「内的・心的要因」と「外的・物的要因」の両面から考察している。まず、論争については、昨日長島父と母が大喧嘩したことを聞いた(あるいは熊楠が寝ている間にその声が聞こえた)ため、それが心に残っていたからだった(内的・心的要因)。そして長島父の後光のようなものは、雷のせいであった。熊楠は、寝ている内に雷が光ったためであろうと述べている(外的・物的要因)。あるいは昨夜激しい光を放つ雷光を見たから(内的・心的要因)だという。熊楠は、日記に必ず天気と寒暖を記している(この日の天気は、朝雨が降り、雷が鳴っていたようだ)。熊楠にとって、天気や寒暖も、夢の因果を考察する際の重要な材料であった。

同年10月5日は、空を飛ぶ夢を見ている。しかも熊楠には翼が生えて、町へ飛び出て、人々を脅かすというものである。目が覚めると、熊楠の両足の下端が痺れていたという。熊楠は、以前も空を飛ぶ夢を見ている(1912年11月21日)。その時は後頭部の一部が痺れていた。しかし、今回は両足が痺れていたという。両足が痺れた結果、足の感覚が鈍くなり、空を飛ぶ夢となった(外的・物的要因)。この日記で、もう一つ注目すべきことは、「又予従来人や物におどされ、魘はることなし、いつも人をおどす自分の聲にてさめる也。」という言葉である。熊楠は、睡眠中に夢に魘<sup>おそ</sup>われ(うなされ)目を覚ますことが何度もあった。そしてその原因についても考察を行っている(本章・第5章5-9参照)。熊楠は、うなされ自分の大声で目が覚めるということがしばしばあった。上記日記における夢もそうだが、夢の中では熊楠が魘う方(能動者)で、魘われる方(受動者)は、他者であるこ

<sup>9)</sup> 羽山繁太郎・蕃次郎らの父。日高郡塩屋村(現御坊市)の民権洋医で、かつ学者であった。熊楠は直記が極めて徳望家であることに深い感銘を受けている。直記は、急病の患者の所へ人力車で行く場合に、患者の家が車夫に駄賃を払うことをとても恐縮し、そのため老いに鞭打って自転車の練習をしていて、その際に誤って転倒し、落命したという。[後藤 2002:40-41 参照]

とがよくあった。しかし、実際に（現実では）声を上げてうなされているのは熊楠自身であった。熊楠が「人はなぜ、どのようにしてうなされるのか」ということに関心を持っていたことは、例えば以下の日記の記述からも分かる。

1912年1月22日[月] 晴

其内松枝おそはれ、予いかにさはりおこすも正気に成ず。其後時ありて正気になり曰く、予に叱られし夢見たりと。〔欄外〕 △夢におそはるゝこと。

（『日記4』 p.117）

このように熊楠は、「夢におそはるゝこと」と、欄外にわざわざメモを残しているのである。

1913年10月7日[火] 大雨、風なし

昨夜少眠、夢におそはれ眼さむ。

（『日記4』 p.307）

熊楠の日記には上記のように、「夢におそはれ……」という記載がよく見られる。熊楠は「夢にうなされること」に悩まされていたのか、あるいはそれが学的好奇心の対象であったのかは分からないが、ともかく「夢でうなされること」にかなりの関心を持っていたことは間違いない。しかし、前述したように、熊楠が我々よりもはるかにリアルな夢を見る人間であったならば、この「夢にうなされること」は、彼にとっては非常に深刻な問題（悩み）だったとも言える。

#### 7-2, 1915年—平瀬作五郎—

〈1915（大正4）年の主な出来事〉

- ・ 5月5日～6日、スウィングルが田中長三郎らと来訪し、アメリカへの招聘を伝えるが固辞する

1915年2月23日[火] 雨 風強し、夜十時前よりやゝ止む

此曉平瀬作五郎氏父子と日光山にまいり、山小屋通夜堂ともいふべき処に宿り、道中の小遣錢費用等割前を同氏の息計算するに、甚だ廉価也、其内此息は一昨卒〔?〕業己に死せしことを思ひ出すに、夜曉き近きにと見るに燈火ともりあり、氣を付けて眼さむれば、ランプ點じたなり臥しあり、これは昨午下、川島氏来りし時、平瀬氏藤島に松葉蘭とりに、父子来りしこと話し、又昨夜油岩話しに、かつて夜通し團八幡へまいるとき、道中塩屋浦にて夜曉近く宿とりしことなどとり合せ、夢に見しなるべし、

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1915年2月23日の夢は、「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が錯綜するものであった。熊楠は夢の中で平瀬作五郎<sup>10)</sup>(1856～1925年)とその子と共に日光山へ行き、山小屋のような所に宿をとっている。夢の中で、熊楠は、平瀬の息子はすでに亡くなっていることを思い出す。外は曉近くで、燈火が灯っていたという。目を覚まし、気を付けて周りを見渡すと、ランプを灯したままであった。これが夢の中の「燈火」の原因であった(外的・物的要因)。また平瀬父子については、昨日の午後、川島友吉と、以前平瀬父子が藤島に松葉蘭の採集に来たことがあったことを話したことが心に残っていたからであった(内的・心的要因)。また、夢の中の宿は、かつて塩屋浦にて曉近くに宿をとったことを、昨夜広島岩吉と話をしたことが心に残っていたからであった(内的・心的要因)。

平瀬は、イチョウの精子の発見で有名である。熊楠と平瀬はマツバラ(シダ類)の共同研究で、親しく交遊を結んでいた(1907年秋から1921年頃まで書簡のやりとりが頻繁に行われた)。

### 7-3, 1916年—夢の原因についての「関係図」—

〈1916(大正5)年の主な出来事〉

<sup>10)</sup> 熊楠は、平瀬作五郎とはマツバラ(シダ類)の共同研究で、一時期極めて親しかった。平瀬はイチョウの精子の発見で有名だが、東大の助手を退職し、中学教師などで終わった。[中瀬・長谷川 1990:121 参照]



- ・ 4月、中屋敷町36番地に、約400坪の家屋敷を購入、転居

1916年8月20日[日] 快 風

朝夢に、どこかえ之くに、田中茂つき来る、それより同人をまき去り、帰る途上履物<sup>はきもの</sup>きれしを、烟管か鍬金の串で、穴あけなほす所へ、塩崎徳三郎其兄とつれ来ると見て、さむ、夢に因あり、縁あること、図の如し、(物音等) 入来るは、此外なり、夢にあり、偶然外来の影響。

[関係図]

昨夜床力にて田中茂のこと談中にありし——茂いつも

↓

焼串といふ字英語 **Skewer** 数日前しらべしことあり

↓

ふじくら草履はきありきし

↓

焼串は真鍮のもの 予常に見たり 故真鍮の烟管

↓

此夢覚て夢の次第を暗記につとむる内、わか山にて今福の西詰に明治八九年頃老たる烟管直しの翁小見世出しありしを眼前に見出す

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1916年8月20日の夢の後、熊楠はある結論を導き出している。「夢に因あり、縁あること、図の如し、(物音等) 入来るは、此外なり、夢にあり、偶然外来の影響。」——つまり、夢には必ず出所(因・縁)があるというのである。それを、図を用いて説明している。また、夢を見ているときに偶然起る物音など(外的・物的要因)も、夢に影響すると述べている。

夢の内容は以下の通りである。熊楠がどこかへ行くと、田中茂がついてきた。熊楠は田中をまいた。帰る途中、履物が切れて、真鍮でできたキセルのような串で穴を空けて直そうとした。その時、塩崎徳三郎(友人か)とその兄と一緒に来るところを見て目が覚めた。

田中茂が夢に出てきた理由は、昨夜、友人の床力（博多為吉）の所で田中の話題が上ったためだった。どうも田中は「いつも」人に付いて回る人物だったようだ。「串」は、数日前 *Skewer*（串・焼串）という英単語を調べて、それが頭に残っていたからだった。履物は草履だったようだ。これは熊楠が「ふじくら草履」を履いていつも歩いていたからだった。また、「キセルが真鍮だった」のは、熊楠は真鍮でできている焼串をいつも見ていたからだったという。ではなぜ「キセル」が夢に出てきたのか。熊楠が、（頭を動かさずに）夢を反芻すると（此夢覚て夢の次第を暗記にうつむる内〔第1章・第2節参照、傍点一唐澤〕）、今福町の西詰まりに、昔キセル直しをしていた老人の映像が眼前に現出した。この昔の記憶が「キセル」の原因であった。

熊楠はこの「関係図」において、さまざまな「内的・心的要因」が影響して（さらに連想が連想を生んで）一つの夢となっていることを表わしている。しかしこれはあくまで「内的・心的要因」である。熊楠が「(物音等) 入来るは、此外なり」と述べるように、夢にはさらに「外的・物的要因」が加わり、より複雑で錯綜したものとなる場合もあるのだ。

#### 7-4, 1917 年—刹那に見る夢—

〈1917（大正6）年の主な出来事〉

- ・ 8月24日、自宅の柿の木から新種の粘菌を発見する（大正15年に粘菌研究の権威・グリエルマ・リスターにより *Minakatella longifila* と命名される）

1917年3月3日[土] 晴

予夢に、マングローブ如き樹の下に居る、若き男一人あり、松枝うつふしになり、福田権八氏の脊をたゞく、予左様のことせぬものなりといふに、止ず、因て松枝を引立て堤の上をつれゆくとみる内さめる、此間松枝の聲にて福田云々といふをきく、め寤めて松枝にきく、福田娘シゲ子と手鞠つき云々といへり、福田といふ名はたゞ一度いへりとのこと也、然らば此語が予の耳に入り、まだ全く終らざる内に、右の夢を見たるなり、夢はまことに短時間に見るものと分る、マングローブの木とは、一昨日中野サエの話にきく、山本常吉（若者）のことは、先刻安本氏と話す所にて、松枝がうつ

臥したるは、昨夜辻氏宅を訪れしに、全氏夫人俯して讀書し居たり。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

上記は、熊楠宅の向いに住んでいた裁判所の書記・福田権八に関する夢である。夢の中で、松枝が福田の背を、うつ伏せになって叩いていた。マングローブのような樹の下だったというから、場所は海岸に近い所であろうか。そこには松枝と福田以外にもう一人若者がいたようだ(山本常吉(?) 山本豊吉〔小学校小使〕か)。熊楠は松枝を制すが、松枝はやめようとしなかった。熊楠が松枝を立てて、堤防の上へ連れていこうとするとき目が覚めた。なぜ福田が夢に出てきたのか。熊楠が目覚めて後、松枝から聞くには、松枝が福田の娘と手鞠をついて遊んでいたとき、一度だけ「福田云々」と言ったという。この言葉が睡眠中の熊楠の耳に入ったため夢に福田権八を見たのであった。目が覚めた時、熊楠は「松枝の聲にて福田云々といふを」聞いている(外的・物的要因)。しかし、松枝は福田のことは一度しか言っていない。松枝が福田のことを言い終わるほんの僅かの間に、熊楠は福田の夢を見たのであった。夢は長いように感じられても、刹那に見ることがある。夢においては、現実生活における「時間」感覚は一切通用しない。「マングローブの樹」は一昨日、中野サエという人物から話を聞いたため、「若者」のことは安本氏と話をしたため、それらが心に残っていたから夢に見たという(内的・心的要因)。「松枝がうつ伏せになっていたこと」は、昨夜近所の話友達・辻源蔵を訪れた際、辻夫人がうつ伏せで読書をしていたので、それが記憶に残って夢に影響したのであった(内的・心的要因)。

#### 7-5, 1918年—心の及ばざる処ろ誰か之を夢みん—

〈1918(大正7)年の主な出来事〉

- ・ 7月9日～17日、『牟婁新報』に「田辺町湊町合併反対意見」を掲載
- ・ 8月15日、米騒動による安否を案じて、常楠宅を見舞う

1918年1月28日[月] 晴 やゝ暖

此頃夢にもと(明治十一年頃)武田万歳先生へ素読學ひに行し時、同学生に山寄八郎

といふ人ありしを見出す、此人は渡辺禄氏とつれありし、此頃大寄氏へ状出せし聯想  
によるならん

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1918年5月10日[金] 朝風雨

朝風呂屋より黒煙夥く横臥て予の宅へ来ると夢む、これは多屋秀太郎氏となりへ薬風  
呂屋出来る噂あると共に、今朝大風の音耳に入し故なり。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1918年1月28日、熊楠は山崎八郎という人物のことを夢に見た。「此頃」というからには、一度だけではなく何度か見たのであろう。山崎は、熊楠が少年時代に武田万歳のもとへ漢文の素読を習いに行っていた時に、同学年にいた者であった。因みに熊楠は「自分の師匠というはこの人しかいない」というほど武田を尊敬していた。なぜ「山崎八郎」が夢に出てきたのか。熊楠は、これはある連想のためだと言う。最近、大崎武之丞という神戸在住の人物から来信があったという(1月22日)。熊楠は1月25日に返信している。熊楠は、この「大崎武之丞」という名前から「山崎八郎」を連想したと言うのだ(内的・心的要因)。多少、強引なような気もするが、熊楠は、自身の夢解釈において、常に、「心の及ばざる処ろ誰か之を夢みん<sup>11)</sup>」、つまり夢には、自分の心が及ぶところに必ず「原因」

<sup>11)</sup> 熊楠の「心の及ばざる処ろ誰か之を夢みん」は他にも、いたる所で見られる。

<sup>12)</sup> 件の婦人が角先生もて男子を犯すは、なし得ざることにあらざれども、それすら尋常なかなか思いつかぬことゆえ、多くの凶画にも本にも見しことなし。(ただし『千一夜譚』には、妻が夫に別れてのち、一国の王となり、夫を捕え来たり、自分男装して、これに男色を口説くことあり。)いわんや心の到らざるところ、誰かこれを夢みん。世間に、とてつものなき変わったことはなきものなり。もしあらば、そは空気がなかつたり、珪素が非常に多かつたりする、他の遊星にすむ衆生のことならん。

[1912年5月23日付高木敏雄宛書簡](『全集8』p.545)(傍線一唐澤)

去年六歳なりし僕の倅ひきこ墓六なる者、絵本を見て僕に語りしは、虎は旧人間だったが、火で焼かれ頬を捻られこんなになる、象は蛇だったからこの通り鼻が長い、鼠はもと尾を結び合わせあつたが切られてこんなになる。誰に聞いたかと問うと、えーひと或人と答えた。つまり自分の手製だ。心の到らざるところ誰がこれを夢みんで、無智の老人、幼稚の児童、自分相応の考えを出したのだ。

〔陰毛を禁厭に用うる話〕1913年10月1日『不二1号』(『全集3』p.259)(傍線一唐澤) 去ば宗教学者杯が人は知ぬ物を恐ると云ふが、一概にそうも言はず。或る人々が特に猫を嫌ふは昔より家に飼てその悪性を見聞したからで、普通に飼養せず、日本で樺太の外にないリンクスに至つては、心の及ばざる処ろ誰か之を夢みんで、猫の分類と聞ぬ内は好悪の念が起らぬとみえる。乃ち人は時として知た物を恐れるのだ。

〔続々南方随筆〕草稿中の未発表原稿「猫や鼠と男女の関係」(南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究6』、南方熊楠顕彰館2004、pp.291-292)(傍線一唐澤)

があるということを、いわば「信念」としていた。熊楠は、普段考えも及ばないことは夢にも見ないと言うのである。「南人不夢駝北人不夢象」（1909年8月27日付日記）ということである（南方に住んでいる人は駝駝を見たことがない。従って夢でも見ることはない。同様に、北方に住む人は象を知らない。だから象を夢に見ることはないのである）。熊楠は、これに類似した言葉をいたる所で使っている。熊楠は、夢というものに、どうしても「結論」を付けたかったのかもしれない。しかし、そのような因果関係だけでは、どうしても答えることのできない夢が、熊楠を捉えて離さなかったことも事実である。つまり夢による「やりあて」（死の予知夢など）である。これについては第4章で詳述する。

同年5月10日、熊楠は、風呂屋から黒煙が夥しく出て、それが風に流されて熊楠宅へ来る夢を見た。「風呂屋」は最近、多屋秀太郎（多屋寿平次の長男。寿平次は山林业を営む田辺きつての素封家で、父・弥兵衛の知人であり、熊楠の保護者格の人物でもあった）から自宅の隣に薬風呂屋ができるという噂を聞いていたから（内的・心的要因）で、「黒煙が（風に流されて）来る」のは、今朝は風が強く、その音が睡眠中の熊楠の耳に入ったこと（外的・物的要因）が原因であった。

#### 7-6, 1919年—錯綜する夢—

〈1919（大正8）年の主な出来事〉

- ・ 4月27日、田中長三郎が来訪、共に湯崎に遊ぶ

1919年3月31日[月] 晴 やや寒 夜寒

此朝、夢に磯間浦に遊ぶ。猿神の祠の山、石をとる為にか無くなれり。然るによく考るに、これは猿神の祠に非ず、前年（夢に）まいりし稲荷祠也。いつの間にか出来たるを夢にみたることあるなり（たしか二、三年前の夢）。夢とは気付かぬが、曾てまいりし稲荷祠ときづき、又進んで猿神社へ向ふ内に雨ふり来り、風の音す。人々みな傘さしあり、予のみ傘なし。西浜与一方へ借りに戻すと見て、さむれば風吹く音し居れり。これは昨夜、榎本房吉氏、今朝磯間へゆくと話せしによるなり。夢中又無頼の男一人車夫になり、傘屋を営み居ると夢む。これは一昨年今頃ポチてふ犬を、雨ふる日、

下女川根米して石友へもたせやりしが、後に下芳養の傘屋兼ねたる車夫方に畜はれ居り、車夫の主人の医の子は無頼者なりと聞し縁によるなり。

(南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究 6』、南方熊楠顕彰館 2004、p.160)

1919年9月13日【土】雨 晴 冷 月明かながら時々微雨ふる。夜十時頃より風強く、台所の東向の白壁墮る。大雨、雷電遠く聞ゆ、電はしきり也。風にて倉の北の方の竹、其軒の瓦をする故、夜中に一本鋸き去る、  
此朝夢に川根米女を見る。人々（誰とも知れず）是はコンチキの娘也といふ、前日の『日本及日本人』に曾古郡の生活百態に、もと使ひし下女がテキ屋の妻となり、旧主人より勝手よくなり、見舞に来る処を書ありし。紺屋の女タケといふもの（山路辺のもの）前年田村へ下女に來りありし、これ等より聯想の成りし夢と見ゆ。

(南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究 6』、南方熊楠顕彰館 2004、p.160)

1919年3月31日、熊楠は、猿神社が鎮座する山がなくなる夢を見ている。採石のし過ぎが原因だった。しかしよく考えると、そこは猿神社ではなく、稲荷社であった。この稲荷社は前年、夢で参拝したことがあったという。二、三年前の夢でいつの間にかこの社ができたことを見たという。因みに、熊楠は古刹・高山寺（田辺市稲成町）内の一角にある猿神社の森を守るために奔走したことがあった。そしてそれは、熊楠による神社合祀反対運動の先駆けとなった。夢の中で猿神社と思っていた場所が稲荷社だったため、熊楠は改めて猿神社へ向かう。その時雨が降ってきた。風もあった。周りの人々は皆傘を持っていたが、熊楠だけ傘を持っていなかった。また、夢の中である男が「車夫兼傘屋」を営んでいた。熊楠はこの男は「無頼者」だと思ったようだ。目覚めた熊楠は「風雨」の原因を、「風吹く音し居れり」としている（外的・物的要因）。夢に「磯間浦」が出てきたのは、昨夜榎本房吉が今朝磯間浦に行く予定だということを熊楠に話をしていたからだった（内的・心的要因）。そして「無頼者」の車夫兼傘屋であるが、この男が夢の中に出てきた理由は、少々複雑である。ちょうど去年の今頃、雨の降る日、熊楠は女中・川根米にポチという飼い犬を友人・石友（日頃から熊楠とは家族ぐるみで親しかった石工の佐武友吉）のところへ持って行かせた。その後ポチは下芳養村の傘屋兼車夫の家に飼われることになった。

傘屋兼車夫の主人は医者であった。そしてその医者の子が「無頼者」であると、かつて聞いたことがあったため、このような夢につながったのだ。昔の飼い犬ポチが飼われている家→傘屋兼車夫→その男の主人が医者→その医者の子供が無頼者→夢の中の「車夫兼傘屋の無頼者」という連想が連想を生んでの夢であった。



写真8 川根米（中瀬喜陽・長谷川興蔵編、『南方熊楠アルバム』八坂書房 1990、p.91）  
写真提供：南方熊楠顕彰館

熊楠の夢には、しばしば女中・川根米〔写真 8〕が登場する。熊楠の「お気に入り」だったのであろうか。熊楠は大柄の女性に関心を示すことが多かった。高野山への採集旅行や東京へ研究所の資金

集めに行った時も、旅館で見かけた大柄の女性について日記に記載している。米も大柄だったのかもしれない。1919年9月13日の夢はこの米に関するものである。米のことを人々が「コンチキの娘」と呼ぶ夢であった。これは前日の『日本及日本人』に載っていた「曾古郡の生活百態」に、ある女中がテキ屋の妻となって昔の主人のときより暮らし向きが良くなり見舞いに来るという内容のことがあり、熊楠はそれを読んでいたのであった（内的・心的要因）。また紺屋のタケという女性（山路辺の者）が前年（ちょうどこの時期か？）田村（松枝の実家）へ女中として来たことを連想して、このような夢を見たようだ。昔からテキ屋と、いわゆる「筋者」とは深い関係にあった。故にその妻となることは「コンチキの娘」と、時に陰口されることもあったのであろう。

#### 7-7, 1920年—松枝が死ぬ？夢—

〈1920（大正9）年の主な出来事〉

- ・ 5月22日～27日、上松翁が来訪、滞在する。共に湯崎、また奇絶峽に遊ぶ
- ・ 8月23日～9月4日、高野山へ採集旅行。土宜法龍と再会

1920年1月30日〔金〕 快 暖

九時頃夢に松枝死し、人々多く集り料理をととなふ（下女台所にて大根をきる音を聞きし故か）亡母も来りあとはこまることといふ、然るに松枝死せずして出来る、予に語るは神子ノ浜の白痴の児が当家構内で死せし内、此家より出葬せざる可らずと、そ

れより忽ち外国の家に入り誰かと英語で議論すると思ふ内眼さむ、(按ずるに、石友へ親不知子を引取しこととみこノ浜の人流感で死せしことを石友で聞しと親不知の子を引取れば其責任を負ねばならぬといふことと松本直吉の姪死してあとがこまると聞きしと取り混ぜたる也)。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1920年1月30日、熊楠齢54のときの日記である。ここまで読んできても分かるように、熊楠の夢は青年期に比べ、明らかに詳細に、複雑に記述されている。この日の夢は、妻・松枝が死ぬというものであった。松枝が死に、多くの人々が集まり料理などをしていった。これは、女中が台所で大根を切る音が睡眠中の耳に入ったからであった(外的・物的要因)。また、夢の中で亡母が現れて「松枝が亡きあとは困る」と話している。しかし、夢の中の松枝は実は死んでおらず、突然熊楠の目の前に現れる。松枝が語るには「神子の浜の白痴の子供が邸内(熊楠宅内)で死んでしまったが、この家から出葬はすべきではない」ということであった。何ともよく分からない内容の言葉である。場面はそれから忽ち外国の家が変わる。熊楠は、そこで誰かと英語で議論する内に目が覚めた。全く脈絡のない、まきに夢であった。しかし熊楠は、この夢の原因を考える。まず「神子の浜の白痴の児」であるが、これはどうやら石友が孤児を引き取ることと、最近神子の浜で流感によって誰かが死んだことを彼から聞いていて、それが心に残っていたためであったようだ(内的・心的要因)。また松本直吉という人物の姪が死んでそのあとが困ることも石友から聞いていた(内的・心的要因)。これらが交わり合い夢となったのだった。一見脈絡のない夢であっても、熊楠は必ず原因を見出そうとする。ここでもやはり、「心の及ばざる処ろ誰か之を夢みん」なのである。冷静に日中の出来事を思い出せば、必ず夢の糸口は見出せる、熊楠はそう考えていた。いや、そう考えようとしていたと言うべきかもしれない。熊楠の見る夢は非常にリアルで、時に正夢となる(やりあてる)こともあった(第4章参照)。自身のことを、ロジカルで科学的な思考の持ち主とっていたふしのある熊楠にとって、そのような不条理な夢はどうしても許容し難いものであったのだ。しかし、その不条理な、あるいは神秘的な夢は、熊楠の心を捕えて離さなかった。熊楠はいつも、科学的でロジカルな思考の持ち主(ペルソナ)であるという自負と、その深層に潜む神秘的なものごと(アニ



マ) からの呼び声のせめぎ合いの中に居たのである。

7-8, 1921 年—川根米—

〈1921 (大正 10) 年の主な出来事〉

- ・ 1 月 21 日、末弟・楠次郎 (46 歳) 死去
- ・ 1 月～3 月、隣家の野中権蔵と日照権をめぐる争う
- ・ 11 月 1 日～28 日、高野山へ採集旅行。18 日、再び土宜法龍と会う

1921 年 8 月 3 日[水] 晴

朝早く井戸岩等来り、井戸がえす、予眼ざめ、又仮寝に川根米女の夢見る、これは四年前今頃井戸岩来り井戸替えし時一人頭に縄をかけ、水を汲むにかむるを、同人大に笑ひ居しことあるによる也。

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1921 年 9 月 8 日[木] 晴

予は川根米女下女一人とつれ来りし夢見る、さめて間に楠本氏門を出る所を妻呼返し、下女きき大声で頼みし由、それが耳に入てかゝる夢見しものか

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1921 年 8 月 3 日の夢は、先述した女中・川根米に関するものである。夢の詳しい内容の記載はないが、熊楠は米を夢に見た原因を次のように考察している。四年前のちょうど今頃、熊楠宅で「井戸替え」をした。その際、工人の一人が、誤って水を被ってしまった。米はこれを見て大笑いしたという。熊楠はこの時の出来事を懐かしい、また微笑ましい思い出として記憶していた。それが本日の「井戸替え」の様子を見た結果、夢の中で昔の記憶がよみがえったのだった (内的・心的要因)。

同年 9 月 8 日の夢も、川根米に関するものである。熊楠は、米が他の女中と一緒に来る夢を見た。これは、熊楠が睡眠中に訪れた画家・楠本秀男が帰宅する際、松枝が呼び返す

のを聞いて、女中が帰ろうとする楠本に向かって大声で（ちょっと戻ってきてくれと）頼む声が聞こえて夢に影響したという（外的・物的要因）。つまり「女中が楠本を呼び戻す声」が耳に入り、それが「米と女中が一緒に来る」という夢につながったのだった。

7-9, 1922 年—夢の中で学ぶ—

〈1922（大正 11）年の主な出来事〉

- ・ 3月26日～8月15日、「南方植物研究所」資金調達のため上京する
- ・ 3月28日、東京着。姉・くまに会う
- ・ 7月17日～8月7日、上松・六鶴・平沼と共に日光に採集旅行を行う
- ・ 11月、常楠からの送金（生活費）が停止される。また、常楠予定の二万円の寄付金の支払いをめぐる、兄弟間が不和になる

1922年12月2日[土] 晴 寒

此朝熊野の深山中の大家（西面氏方で）えゆき、村民歓迎さるゝ内、小児来り、予の背にかみつくこと數回と思ひ、眼さめ、脈膊非常なり、此夢の中に、西面氏妻女で若き婦人、以前此深山重疊の所を旅行せしに、常燃燈といふ処ありしといふ、予それは燈佛をまつりし故趾と思ふ、こんな未開の地にて、昔しの人が旅行して、見聞せることを、佛説に附会せしこと多かりしと思ひ、又其見聞せしことも珍しと思ふものは〔の？〕、実はその又昔し佛説盛行の時の遺痕なること多かるべし、されば古きを探るは、注意を要すと思ふ内、眼さめたり、右小児予の脊に噛付ることは、前年人類学雑誌へ出せし十津川の肉吸ひ鬼のことによるか。

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）

1922年12月2日、熊楠は小児に背中を噛みつかれる夢を見た。これは熊楠が、1918年2月『人類学雑誌』（33巻2号）に掲載した「十津川の肉吸い鬼」（「肉吸いという鬼」『全集2』p.363）のことを思い出したせいではないかと言う（内的・心的要因）。また、夢の中で兵生の富豪・西面欽一郎の妻が、「常燃燈」の話をしている。熊楠はこれを聞き、

「どんな未開の地であっても、そこに何か珍しいと感じるような物がある場合、それは昔、仏教が興盛していた時代の遺痕である可能性がある。十分注意して見なければならない。」と、フィールドワークの心得を考えている。夢の中でも熊楠は常に歩く研究者（フィールドワーカー）であった。

因みに熊楠が、いわゆる「神社合祀令」に対して最も危惧したことは、地域の小さな神社や祠が、無下に破壊されることであった。いくら小さな神社であっても、そこにはさまざまな伝承や口承が残っている可能性があり、それらは民俗学上、非常に重要な意味を持つこともある。そのことを無視して神社を破壊してしまえば、それこそ伝承などはそこで途切れてしまいかねない。もう一つ、熊楠が危惧したことは、神社合祀によって、社と共に、その周りの森も伐採されてしまうことであった。動物的生命の象徴である「熊」と植物的生命の象徴である「楠」を名に持つ熊楠にとって（当然、我々にとってもそうなのだが、熊楠にとっては特に）、森とはまさに生命の「根源的な場」とでも言うべきものであった。熊楠は自身の名前に非常に愛着を持っており、論考などで取り上げることもあった。特に熊楠は、「楠を見る度になぜか独特な感じを受ける」ということを述べたりもしている<sup>12)</sup>。森は、熊楠という個人の生を包み込む場であり、同時に森そのものは、熊楠個人の生の中に含まれてもいた。いわば熊楠にとって、森とは「根源的な場」であった。それは、アリストテレスの言う「ウーシア ousia」と呼んでも良い。「ウーシア」は本質（根源）であり、また「個物」を離れて存在することはない。当然「ウーシア」なしに、個的生命も在り得ない。全てを包み込むと同時に、個人の生にも含まれている「ウーシア」＝森は、熊楠にとって、まさに「生命そのもの」であったのだ。

秘密とてむりに物をかくすということにあらざるべく、すなわち何の教にも頭密の二事ありて、言語文章論議もて言いあらし伝え化し得ぬところを、在来の威儀によつて不言不筆、たちまちにして頭から足の底まで感化忘るる能わざらしむるものをいい

<sup>12)</sup> 熊楠は、論考において、以下のようなことを述べている。

なканずく予は熊と楠の二字を楠神より授かつたので、四歳で重病の時、家人に負われて父に伴われ、未明から楠神へ詣つたのをありありと今も眼前に見る。また楠の樹を見るごとに口にいうべからざる特殊の感じを發する。

[1920年11月「南紀特有の人名一楠の字をつける風習について」『民族と歴史』4巻5号] (『全集3』p.439)(傍線一唐澤)

なるべし。…（中略）…かくのごときは、今日合祀後の南無帰命稻荷祇園金毘羅大明権現というような混雑錯操<sup>まじりあそび</sup>せる、大入りで半札<sup>はんふだ</sup>をも出さ<sup>だ</sup>にやならぬようにぎっしりつまり、樹林も清泉もなく、落葉飛花見たくてもなく、掃除のために土は乾き切り、ペンキで白塗りの鳥居や、セメントで砥石<sup>とぎし</sup>を堅めた手水鉢多き俗神社に望むべきにあらざるなり。

[1911年8月29日付松村仁三宛書簡] (『全集7』p.506) (傍線—唐澤)

上記書簡は、熊楠による「神社合祀反対運動」の際、柳田国男によって『南方二書』として識者に配布されることになるものの一部抜粋である。熊楠による「神社合祀反対」の主張の根底には、このような「感覚」があった。つまり、我々「個的生命」の土台・根底たる「生命そのもの」とでも言うべき森＝「ウーシア」からの、「言語」・「文章」・「議論」では言い表し難い（明示化し難い）強烈な「感覚」である。しばしば〈中間〉（「根源的な場」と個体が生命活動を実際に営む場の間）に立つことができた熊楠は、この「根源的な場（統一）」からの力を、特に敏感に感受することができたのである。

#### 7-10, 1923年—風呂と亀—

〈1923（大正12）年の出来事〉

- ・ 1月10日、土宜法龍（高野山管長）死去（69歳）
- ・ 9月1日、関東大震災
- ・ 「十二支考」連載中止

1923年7月5日[木] 雨 夜十一時頃大雨、三時過已に止み天晴れあり、星出で冷

夜三時頃起る、起る前夢に松枝もと東京神田錦町鈴木久七方如き下宿屋（旧旗本屋敷体〔邸？〕）に居り、予は別の処に居るか、夜更て風呂場を見る、亀大なるもの一、三絃の糸塊をのみ、左手にてかき出す、釜の如きものの上<sup>うへ</sup>にのりあり、その下の風呂焼き口<sup>むしろ</sup>に席の如きもの下女片付て、危く火付きかゝり居る、因て松枝を呼に、漸く出来

らんとすと見てさむ、(連日下女風呂たき口に薪多くもえ出るを見すてあるを予直すことあり) 亀は本日朝松枝とならびて見るに小亀きくめい石の上に上り、あぶなき所を下へはい落ちしが、忽ち頭を右の方に向けて落るを奇体なことと思ひ居し也) [挿画あり 以下はその説明文] 落ればかくの如く 石の上に向て落止る也

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1923年12月1日[土] 快 寒

川根米世帯かゝとなり、予方にあり木綿を買ひ来り時悪く松枝に問ひかえし、来ること度重なるより予かゝることは一度聞て決すへしと叱ると夢みて、さむる、昨夜鼠の話の材料を往年の日記でしらべる内に此米夢に見しことを記しありし、それより又見しことと見ゆ、

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

熊楠の夢には、しばしば亀も登場する。この日(1923年7月5日)の夢は、ある下宿で、熊楠が風呂場を見ると、一匹の大きな亀が三絃の糸の塊を飲みこんで、左手で掻き出そうとしているというものであった。亀は風呂釜の上に居り、ちょうどその時、女中が風呂の焚口のむしろ蓆を片付けようとしていた。それに危うく火が付きそうになっていた。熊楠は松枝を呼んでいる。そして、松枝が出てくるところで目が覚めた。これは、最近、連日のように女中が風呂の焚口に薪がまだ燃えているのに、そのまま放置しているのを熊楠が見つke、片付けていたため、それが記憶に残り、似た状況を夢に見たのだった(内的・心的要因)。また亀の夢は、その日に小亀が石の上に登り、ズルズルと這いながら落ちたとき、頭を右に傾ける様が、何とも奇態だったので、それが心に残り見たのであった(内的・心的要因)。

同年12月1日は、元女中の川根米に関する夢である。夢の中で米は、既に母親となっており、熊楠邸に木綿を買いに来たようだ。熊楠は「何度も来るのではなく、来るならば、一度松枝に聞いて決めろ」と叱っている。熊楠は昨夜、「鼠の話」に関する、論考で使えるような材料が何かないかと思い、昔の日記を調べていると、たまたま米のことを夢に見たことが書いてある記事を見つけたため、このような夢を見たのだと言う(内的・心的要因)。

熊楠にとって、日記とは、日々の出来事を記録するための媒体というだけでなく、論考を書くための「研究ノート」の役割も果たしていた。因みに翌年1924年は鼠年であり、例年の如く干支の話を『太陽』に載せるために、熊楠は鼠について調べていたのだった。しかし、「十二支考」は9月1日の関東大震災の後、雑誌の編集方針が変わったため連載は中止され、「鼠の話」は結局掲載されなかった。

#### 7-11, 1924年—ロンドンの少年—

〈1924（大正13）年の主な出来事〉

- ・ 1月30日、松枝の母・田村さと（77歳）死去
- ・ 3月21日、兄・弥兵衛（65歳）死去。日記に「午後三時十五分」と死亡時刻を記載
- ・ 姉・くま（60歳）死去

1924年6月14日[土] 晴

此朝夢にブリチシュ博物館にありし円顔碧眼の少年とつれ高き大なる馬車にのる。同乗者若干あり、しばらくする内一所にとまるにケンシントンなり。博物館博物学部の南と分るとみてさむ。これは多屋孫方の稲田喜三郎氏少年の顔なり。似居る故見しなり。但し喜三郎氏少年に似たといふ事寝中思ひし事少しもなし、夢に似たものを思ひ付くなり。

（未刊行日記・岡本清造翻刻参照）

1924年の夢は、ロンドンでの出来事である。熊楠は丸顔で碧眼の少年と大きな馬車に乗っていた。しばらくすると、ケンジントン博物館に着いたようだ。そこは、博物学部の南であると分って目が覚めた。この少年の顔は、昔から南方家と極めて親しかった多屋家に居た稲田喜三郎という人物に似ていた（内的・心的要因）。しかし夢の中では、稲田と少年が似ているとは思わなかった。目が覚めてからそう思ったのだった。

この年、熊楠は相次いで親類（松枝の母・田村さと、兄・弥兵衛、姉・くま）を亡くしている。しかし、亡くなった親類の夢は兄・弥兵衛のことを一度見たのみであった。

1924年11月28日[金] 半晴

昨夜一時過臥せしが眠られず、今朝九時過亡兄弥兵エ和歌山寄合橋辺に寓を定むと夢み居る内松枝にさまさる、

(未刊行日記・関西・南方熊楠翻字の会翻刻)

因みに、弥兵衛が亡くなった時、熊楠は死亡時刻を「午後三時十五分」と日記に記している。熊楠は「死亡時刻」に関心を示していた。それは「死の予知夢」(やりあて)と関連があると考えられる。このことについては第4章・第15節で触れることにする。

#### 7-12, 1925年—夢を見ない日々—

〈1925(大正14)年の主な出来事〉

- ・ 1月31日～2月2日、矢吹義夫宛に長文の書簡(いわゆる「履歴書」)を執筆する
- ・ 3月12日、孫文、北京で死去
- ・ 3月15日、熊弥が高知にて発病する

1925年5月19日[火] 晴 やや涼

[欄外] 此頃予少しも夢を見ず

(未刊行日記・岡本清造翻刻参照)

1925年は熊楠にとって悲痛の年であった。3月15日に高知へ受検に向かった息子・熊弥が精神的な病を発症し、悲しみに暮れる一方、その対応に奔走している。研究の時間はおろか睡眠時間を削っての看病であった。寝ても覚めても熊弥のことで頭がいっぱいで、まさに夢を見る暇さえなかった。熊楠は、夢を精神的に深い思索があるときに見ていることが多い。しばしば深く思索に耽るときに夢を見ている。熊楠の夢には、しばしば本で読んだ内容、または自身が調査中の事柄が現れている。しかし、熊弥の病気が発症した直後は、とにかく現実を目の前に起きている状況を何とかしなければならなかった。心は全て

熊弥で占められ、外的状況もまた、熊弥の看病で占められていた。内的にも外的にも熊弥一色であった。

※

ここまで（1925年）が、とりあえず活字化されている日記である。1914年以降は、未だ刊行されていない（1919年のみ、『熊楠研究 6～8』で翻刻・出版済み）。そのため筆者は、岡本清造氏が翻刻したもの及び南方熊楠翻字の会で翻刻したものと現物の日記（南方熊楠顕彰館蔵マイクロフィルム）とを照合しながら作業を行った。

最後に、晩年（1941年）の夢の記述を少しだけ見ておきたい。

#### 7-13, 1941年—晩年における考察—

〈1941（昭和16）年の主な出来事〉

- ・ 3月10日、親友・喜多幅武三郎（76歳）死去
- ・ 11月2日、熊弥に『日本動物図鑑』を贈る
- ・ 11月16日、文枝に『今昔物語』を贈る
- ・ 12月8日、真珠湾攻撃、「大東亜戦争」始まる
- ・ 12月29日、午前6時半、死去

1941年10月15日[水] 曇 冷

朝五時四五分起く 其直前夢に看護婦の報告文如きもの眼前に見える 服薬の効験に付て（何時何十何分 軟■体大便経過 何時何十何分 小腹微痛 何時何十何分 屁玉構成 何時何十何分屁経過といふ風也 これは昨夜一錠のみたるラキサトール錠の広告文などより案出せるか） それより又臥し九時四五分起る、

（未刊行日記・東京・南方熊楠翻字の会翻刻参照）

晩年になっても、日記における熊楠の夢の記述は続き、その考察方法も基本的には変わらない。1941年10月15日、夢で看護婦が記した「報告文」のようなものを見ている。そこには服薬の効能について書いてあった。この夢の原因は昨夜飲んだ、「ラキサトール」



の広告文を読んでいたからであった。それが記憶に残り夢になったのである（内的・心的要因）。因みに「ラキサトール」とは便秘薬のことである。熊楠は終生、便秘に苦しんだ。安藤みかんを毎日六個ずつ果汁にして下剤代わりとして飲んでいた時期もあったという。

## 第8節、見えてくる事

ここまで、熊楠の日記における夢の記述を見てきて言えることは、熊楠は決して、ただやたらに夢を記録したのではないということである。何の意味もなく夢を記録したわけではなかった。その記述の「背景」には、しっかりとした理由があったのだ。

熊楠は「夢の思い出し方」を考案し、実践した（第1章・第2節参照）。それほどまでに（どうしても思い出し記録する必要があるほどに）、熊楠にとって、夢は重要なものだったのである。そしてそれは、熊楠による神話や伝説などの研究、つまり民俗学の研究における基礎でもあった。神話や伝説は、多くの人々の夢や空想が絡まり合っていてきている。熊楠は、自身の夢の原因追究・考察を通じて、神話や伝説を研究するための「訓練」をしていたと言えるかもしれない。

夢を記録し始めた当初は、夢の原因の考察は単純なものが多い。「外的・物的要因」のみであったり「内的・心的要因」のみであったりする。しかし、「夢の思い出し方」をマスターし繰り返すうちに、熊楠の夢の記述は長くなる。つまり詳細に、そして複雑に入り組んだ夢を思い出すことができるようになっていく。それは同時に、夢の原因の記述もより複雑になっていくことを意味する。「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が交わり合い、また連想が連想を生み、夢は合成される。しかし熊楠は、夢がどれほど複雑であっても、そこには必ず原因があると考えた。いわば「心の及ばざる処ろ誰か之を夢みん」で、まったく見たことも聞いたこともないことを、人は夢に見ないということである。「南人不夢駝北人不夢象」、駝を見たことがない南の人が駝の夢を見ることはできない。同様に象を見たことのない北の人が象の夢を見ることはできないのだ。原因の糸を見つけ出し、一本一本検証すれば必ず答えは出る、熊楠はそう考えた。

熊楠にとって夢とは「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が交わり合う「事」であった。そして「事の学」は、熊楠の研究姿勢を根底で支えていた。

しかし、である。「外的・物的要因」と「内的・心的要因」が交わる処に夢が現出する——この事が、果たしてそこまで不思議であろうか。夢においては、現実世界とは「時間」・「空間」観念が異なる——それは、ここまで執拗に探究しなければならない事柄なのか。これらの事柄は「夢だから当たり前」と言えば、実はそれで済む話なのではないだろうか。我々であれば、熊楠のように生涯をかけて、そのような夢の原因などを記録することは、まずないであろう。なぜなら、我々は、夢と現実をはっきりと「区別」しているからである。言い換えるならば、いつも自己の「ポジション」を明確に設定しているからである。つまり我々は、夢の世界から現実の世界へと簡単に「自己設定」をしているのである。しかし、熊楠にとって、それは非常に難しいことであった。熊楠には常に、夢の世界から現実の世界へ帰還できなくなるのではないかという懸念が付きまとっていたのだ。「退路」を見失うのではないかということ、いつも心配しなければならなかった。熊楠にとって、「現実界」に戻り、自己を「ポジション設定」するためには、現実の世界と夢の世界の特徴をはっきり見極めておく必要があったのである。夢と現実の違いを当たりのようにわかまえている我々とは異なり、熊楠にとってそれは全く当たりの事柄ではなかったのだ。

自分が今居る「場所」がどこなのかを確認することが、熊楠にとっては必要であった。そうでなければ、夢と現実の境が不鮮明なまま、誰かを傷つける、最悪の場合殺してしまう可能性さえあったのだ（第1章・第3節参照）。熊楠は、自身の極端に不安定な「ポジション」を確定するためにも、夢というものの原因・特徴を追究し、それらが現実とどのように異なるのかを、しっかりと把握しておく必要があったのである。

## 第9節、「中性者」になり得なかった熊楠

これまで述べてきた通り、熊楠が居た「場所」は、常に極端であった。いわば熊楠は、「中間」を保持できなかったのである。その結果、他者との関係において、暗黙的な共通了解を形成できなかった。つまり、皆と同じ普通の判断を安心して下すことができなかったのである。熊楠にとって、他者が求めている事柄を「常識」の枠内で（「中間」において）、答えることは非常に困難なことであった。熊楠の論考などが我々にとって、しばしば読みづらいもの・一貫性のないものだと感じられる原因の一つは、そこにあると思われ

る。

端的に言うならば、熊楠は「世人 *das Man*」にはなれなかったのである。そして、この「世人」に憧れつづけた。

誰かであるのは、このひとでもなければ、あのひとでもなく、そのひと自身でもなく、幾人かのひとでもなければ、また、すべての人々の総計でもない。「誰か」は、中性的なものであり、つまり世人なのである。

[Heidegger 1927, 原・渡辺訳 1971 : 240]

「世人」とは、いわば「中間」＝「適当な距離」において、空談・好奇心を営む我々である。そこにおいて、我々は、このひとでもなければ、あのひとでもない、いわば「中性者」になっている。「極端人」・熊楠は、現実の生活において、決してこの「中性者」になることができなかつた。だからこそ、熊楠は「中間」に執拗なまでのこだわりを見せた。「適当さ」・「曖昧さ」こそが、「中性的なもの」・「世人」を成り立たせている基盤である。そのような場に居ることのできなかつた熊楠には、常に「不安」が付きまとっていたと言える。対象との「距離」が極端になるということは、対象と同化し「一様性」へ溶け込むこと、あるいは対象から離れすぎ、対象も自己も見えなくなる（消失する）、つまり「無」になることである。「一様性」・「無」（厳密には真の「無」の一步手前の状態）は、「不安」を呼び起こす。「自己を完全に失うのではないか」という「不安」である。しかし、「一様性」・「無」において、自己が「不安」を呼び起こされるということは、実は、まだ完全には自己を失ってはおらず、その中において自己は、麻酔をかけられた状態（あるいは半睡状態）のようなものになっていると言えるかもしれない（アダムとエヴァが、安穏と平和＝「無」のエデンの園においても神の命令に聴従するだけの耳を持っていたように）。真の「無」に留まってしまえば、自己は消失し「不安」さえ呼び起こされない。

「不安」は、熊楠に「ポジション」の確定を要請する。——しかし、それでもやはり熊楠は、「適当な距離」を保持することができず、極端な場所へと自己を置くことしかできなかった。我々も、確かに「不安」を抱くことはある。我々は、多かれ少なかれ、他人（というより「世人」あるいは世間）との「差異」を気にかけている。それは、この他人との

「差異」を無くそうとするためであったり、逆に、この他人と「差異」をつけ優位に立とうとするためであったりするのだが、そのように「差異」を気にすることが、我々を「不安」にさせる。もっと噛み砕いて言うならば、自分が「世間ずれ (= 差異)」しているのではないか（「ひと」とは違うのではないか）という「不安」、あるいは自分が「ひと」と同じで（「差異」がなく）、何ら独自性を持っていないのではないかという「不安」である。しかし、そのような「差異」を気にすることができるのは、我々が「中間」という基盤で、他者と適当な関係を持っているからである。

一方、熊楠の場合、この「差異」を無くそう、「差異」をつけようと、能動的に意識しなくても、「差異」が無くなる程、他者と極端に接近しまう、あるいは極端に離れてしまう気質の持ち主であった。我々の（あるいは「頹落」している我々の）「不安」が、「適当な距離」における他者との「差異」に対するものであるのに対して、熊楠の「不安」とは、「極端な距離」において、自己を完全に失うのではないかという「不安」であったと言える。

「自己の死」——極端な場において、常にこれに直面していた熊楠は、いわば「世人」から引き離された「単独の自己」として、この「不安」に耐えつつ生きねばならなかった。

※

熊楠は「中性的なもの」にはなれなかった。そして「中間」を求め続けた。「中間」に生ずる夢は、自己（心）と対象（物）との間に「適当さ」がなければならぬ。両者が適度に交わるとき、夢（事）は現出するのである。

——このように確かに、多くの夢は、(形式的には) 外界の物的要因が睡眠中の身心に何らかの適度な影響を与えて現われるものである。しかし、そのような単線的な考え方では、どうにも答えられない事象が、熊楠を捕えて離さなかったことも事実である。それは例えば、夢による「死の予知」などである。熊楠は近親者に関する「死の予知夢」をしばしば経験している。このような、「事の学」だけでは答えられない夢があることを熊楠は身をもって知っていた。その背景には、那智山での様々な神秘体験や、マイヤーズの大著『ヒューマン・パーソナリティ』の影響があることは間違いない。

熊楠にとって夢とは「現実」と「幽界」とが混じわる場所でもあったのだ。

扱<sup>さて</sup>烏<sup>う</sup>羽<sup>ば</sup>玉<sup>たま</sup>の『夢』てふ物は死<sup>し</sup>に似<sup>し</sup>て死<sup>し</sup>に非<sup>あ</sup>らず生<sup>あら</sup>に似<sup>し</sup>て生<sup>あら</sup>に非<sup>あ</sup>らず、人世<sup>ゆうかい</sup>と幽界<sup>ゆうかい</sup>の中間<sup>ちゅうかん</sup>に  
位<sup>まい</sup>する様な誠<sup>まこと</sup>に不可思議<sup>しぎ</sup>な現象<sup>げんしょう</sup>で種々<sup>ざつた</sup>雑多<sup>めづら</sup>の珍<sup>めづ</sup>しい問題<sup>もんだい</sup>が夢<sup>ゆめ</sup>に付<sup>た</sup>て断<sup>た</sup>ず叢<sup>むら</sup>り居<sup>が</sup>る。

[1918年11月～12月「夢を替た話〔南方先生百話〕」『牟婁新報』]

(南方熊楠顕彰館所蔵)

熊楠は、夢というものは「生（この世）」と「死（あの世）」が混じわる〈中間〉にある  
ようなものであると言う。それ故、そこでは様々な不思議な出来事も起こると述べている。  
次章では、その夢に関連する不思議な出来事を中心に見ていきたい。

## 参考文献

- ・飯倉照平、『南方熊楠 梟のごとく黙坐しおる』、ミネルヴァ書房、2006
- ・岩村忍編・訳、「燕石考」、『南方熊楠文集2』、平凡社、1979
- ・ *WEBSTER'S NEW INTERNATIONAL DICTIONARY OF THE ENGLISH LANGUAGE*, G. & C. MERRIAM COMPANY, 1920
- ・岡本清造翻刻資料（未刊行 1914～1925年翻刻分）（南方熊楠顕彰館所蔵）
- ・関西・南方熊楠翻字の会翻刻資料（未刊行 1924年翻刻分）（南方熊楠顕彰館所蔵）
- ・後藤正人、『南方熊楠の思想と運動』、世界思想社、2002
- ・東京・南方熊楠翻字の会翻刻資料（未刊行 1941年翻刻分）（南方熊楠顕彰館所蔵）
- ・中瀬喜陽・長谷川興蔵編、『南方熊楠アルバム』、八坂書房、1990
- ・Heidegger, Martin, *Sein und Zeit*, 1927／邦訳：原佑・渡辺二郎、『存在と時間』（原佑責任編集、『世界の名著』第60巻、中央公論社、1971所収）
- ・長谷川興蔵・武内善信校訂、『南方熊楠 珍事評論』、平凡社、1995
- ・『ブリタニカ国際大百科事典』、Britannica、2004、電子辞書版
- ・Hegel, G. W. F. *Phänomenologie des Geistes*, 1807／邦訳：檜山欽四郎、『精神現象学（上）』、平凡社、1997
- ・松居竜五・月川和雄・中瀬喜陽・桐本東太編、『南方熊楠を知る事典』、講談社現代新書、1993

- ・南方熊楠資料研究会編、『熊楠研究 6』、南方熊楠顕彰館、2004
- ・南方熊楠著／奥山直司・雲藤等・神田英昭編、『高山寺蔵 南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893－1922』、藤原書店、2010
- ・南方熊楠、「夢を替た話〔南方先生百話〕」『牟婁新報』、1918（南方熊楠顕彰館所蔵）
- ・Levinas, Emmanuel, *Le temps et l'autre*, 1948／邦訳：原田佳彦、『時間と他者』、法政大学出版局、1986 あ